

古代オリエント文明

【古代エジプト史】

<エジプト学の起こり>1799年, [1] 軍の将校ブサールが [2] 石を発見。

[エジプト遠征=英のインド経営を断つため]

{ [3] (神聖文字) …碑文・墓室・石棺などに刻まれた象形文字
デモティック (民用文字・民衆文字) 前 5000 年頃, 仰韶文化 ※長江文明
ギリシア語 [大英博物館 (ロンドン)] 1832 年, [4] が解読。

前 4000 年頃から 40~50 のノモス (エジプト語でハト=村落) の存在有り 抗争の後, 上・下エジプトに統合。

∴ [5] 王朝時代 [プトレマイオス朝時代の歴史家マネトの区分]

∴ [6] 語系の住む閉鎖的地形 [自然な要塞 (北=地中海・東西=砂漠)]

→安定した王権の成立=来世観の発達

※ナイル川の増減水を利用した豊かな農業 (定期的氾濫+麦の生育サイクルが整合)

【古王国時代 (前 27~前 22 世紀) = 約 500 年 (第 3~第 6 王朝)】

前 3100 年頃, メネス (ナルメル) 王が両 (上下) エジプトを統一。都, [7]

第 4 王朝のとき最盛期=ピラミッド時代 [クフ (最大)・カフラー・メンカウレー]

∴メンフィスの近くの [8] に設立。[第 6 王朝時代以降衰退。]

「エジプトはナイルのたまもの (ヘロドトス『歴史』 (前 5 世紀半) に記載)」

※エジプト文化の隆盛。< [9] 暦の誕生と移り変わり>

太陽暦 { ナイル川の増水がメンフィスに達する日 (7 月 19 日) を新年として 1 年を 12 カ月にわけ,
各月は 30 日よりなり, 毎年 5 日を加算する。

カエサルによりローマで公布 (前 45 年, [10] 暦公布) →1582 年 グレゴリウス暦公布

【中王国時代 (前 21~前 18 世紀) = 約 250 年 (第 11・12 王朝)】

前 2000 年 竜山文化 前 20 c クレタ文明

前 2050 年, 第 11 王朝が [11] (現ルクソール) に起こりエジプト統一。

∴ [12] [テーベの守護神]・ラー信仰の隆盛。

前 17 世紀頃, [13] (アジア系遊牧民) が馬と戦車で侵入。中王国滅亡後, デルタ地帯を支配

【新王国時代 (前 16~前 11 世紀) = 約 480 年 (第 18~第 20 王朝)】

ヒクソスを撃退して成立 都テーベ

前 1600 年 ミケーネ文明・前 16 世紀 殷王朝

前 1550 年頃, 第 18 王朝の成立。トトメス 3 世 [シリア進出 (最大版図を形成)]

[14] 世 (イクナートン=イクン・アトン)



一元的支配の強化=前 14 世紀前半, テーベの神官 (アモン=ラー信仰) に対抗上, <アマルナ美術>

[15] に遷都し, アトンを唯一神とする ※アマルナ美術 (写実的な表現に特色)

ツタンカーメン（トゥ＝タンク＝アメン）の時テーベ、アモン＝ラー信仰に戻る。

[※王陵の墓（テーベ近郊＝1922年発掘）＝横穴式羨道墳]

第19王朝，[16] 世[シリアに進出し，ヒッタイトと交戦。（∴カデシュの戦い）]

戦いは前1275年頃（または前1286年頃）その後，和約 ∴モーセの出エジプト（前1269年）

前12世紀[17]・アッシリア進出（前7世紀に一時的に支配）により衰退。

前525年，アケメネス朝ペルシアの侵入で滅亡。

【古代メソポタミア地域史】ティグリス・ユーフラテス川「肥沃な三日月地帯」米^{フル}レス^{テッド}命名

<※メソポタミア学の起こりについて>

粘土板の[18] 文字

ダリウス1世の

[19] 碑文発見

※ヘンリー＝[20]

{ ペルシア語
エラム語

バビロニア語（古代アッカド語）

{ 1802年，グローテフェント（独人）

ペルセポリス碑文で解読

（英中尉）の発見・解読

∴開放的地形＝諸民族の激しい興亡[現世的様相]

【[21] 人都市国家】

前3300年頃，ウル・ウルク（『ギルガメシュ叙事詩』）・ラガシュに建設。

[22]（聖塔）を中心に神権政治を展開∴楔形文字，六十進法，占星術，彩文土器

銅や青銅などの金属使用

太陰暦（※太陰太陽暦）

1週7日制の使用

【アッカド王国（前24世紀頃～前22世紀頃）】

[23] 語系アッカド人がシュメール都市を統合。

前24世紀頃，サルゴン1世（戦争王）がメソポタミア最初の政治的統合を達成。

※前2100年頃ウル第3王朝[シュメールの復活][24] 法典（現存する最古の法典）

2代，シュルギ（シュルギ法典）

∴リピトイシュタル法典（前1930年，イシン王朝）

【バビロン第1王朝（古バビロニア王国 前1900年頃～前1600年頃）】

セム語系アムル人の建国。都，[25]

（神の門）]

守護神マルドゥク

前18世紀頃，6代[26] 王の中央集権。

法典の編纂

{ 約280項目・慣習法の成文化

{ (同害)[27]

法の原理「目には目を，歯には歯を」

[196条以下身分的規定有り＝被害者の身分（階級）により異なる刑罰]

←前1600年頃，[28]

の侵入で滅亡。

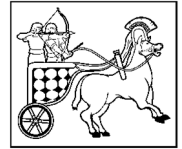
【インド＝ヨーロッパ語系諸民族の台頭】

前 1600 年ミケーネ文明・前 16 世紀殷王朝

【ヒッタイト王国（前 1650～前 1200）】 [29] に成立。

[30] 武器（最初に使用）と馬の使用で西アジアを制圧。

都ハットウシャ（ボアズキョイ＝現トルコ領）



前 16 世紀初頭, [31] 王国を滅ぼす。

∴ 前 1286 年, カデシュの戦い（×新王国（ラメス 2 世）のエジプト軍）

← 前 1200 年頃, [32] の侵入により滅亡。

※【ミタンニ王国】 フルリ人が多数移住。都 ワシュカンニ 馬の飼育技術で有名。

※【カッシート（カッシュ）王国（前 1600 年頃～前 1150 年）】

バビロニア支配するが政治, 文化に忠実 [海の国] を間に入れ バビロン第 3 王朝 とも称す。

エラム人により滅亡

【セム語系諸民族の活動】

《 [33] 人》 前 1300 年頃, アラビアからシリア地方へ移住

前 13 世紀頃 [34] を拠点とし, 内陸アジア隊商貿易 を独占。

前 8 世紀末アッシリアに服属後, アラム語は国際語（アケメネス朝の公用語）となる。）

{アラム文字→ソグド文字→突厥文字・ウイグル文字}

《 [35] 人》 ミケーネ文明の衰退を機に躍進 レバノン杉, ガラスエ芸

前 15 世紀, 東地中海沿岸に都市国家を形成

[シドン, ティルス（前 9 世紀頃, [36] を建設）, ウガリット, ビブロス, ベリトスなど]

ヒッタイト衰退後急速に発展。前 12 世紀 地中海貿易 を独占し大西洋沿岸まで植民市建設

フェニキア文字＝エジプト象形文字やシナイ文字等の影響を受け 22 字の [37] 文字創始

ギリシアへ伝播＝ギリシア暗黒時代（前 1200～前 800） [左→右・母音の表記が加わる。]

{都市国家の繁栄の影にフェニキアの影響あり（文字・造船術・植民市の建設）}

《 [38] 人》 前 1500 年頃, ユーフラテス川流域から [39] に移住。

1 部エジプトに入り新王国の抑圧から前 13 世紀頃 [40] による 出エジプト でカーンに移る

前 11 世紀末頃, イスラエル王国を樹立。2 代 [41] （ペリシテ人を排除・首都エルサレム）

前 960 年頃, 3 代, [42] [王国最盛期。シオンの丘に宮殿・神殿を建設。]

前 922 年, 南北に {イスラエル王国（前 922～前 722）← [43] により滅亡。

分裂 {ユダ王国（前 922～前 586 首都エルサレム）

← [44] により滅亡 [※バビロン捕囚（前 586～前 538）]

<※ユダヤ教（一神教）の形成。>

{前 6 世紀後半，アケメネス朝ペルシアにより解放後成立。ヤーウエの神殿再築。}

[ゾロアスター教（善悪二神）の影響！＝サタン（悪）の思想・『最後の審判』]

※ユダヤ教の成立。{ヤハウエ唯一神礼拝，ヘブライ語で「在りて在る者」の意}

前 6 世紀，アケメネス朝ペルシアによるバビロン捕囚解放後に神殿を再建し，教団化する。

キュロス 2 世（寛容主義）＝前 539 年に新バビロニアに侵入し，バビロンに入城，翌年，解放令を発布

旧約聖書[律法主義（モーセの十戒）

＝イエルサレム神殿再建（第 2 神殿）←70 年ローマ人が破壊

一神教（ヤハウエ）・偶像を作らず・神の名を悪用せず・安息日の清潔
父母孝行・不殺生・不姦淫・不盗・不虚偽・人の物を望まぬ

救世主思想 [ヘブライ語でメシア，ギリシア語でキリスト] 選民思想 最後の審判

∴ 前 63 年，ローマ支配下によるヘロデの悪政期。[ユダヤ教の分裂]

サドカイ派 [モーセ律法のみ重視，親ローマ的立場]
パリサイ派 [モーセ律法以外の伝承も尊重し，形式主義に陥る。反ローマ的立場]

ナザレのイエスの出現 {神の絶対愛＝「ひたすら神を信ぜよ」 隣人愛＝「汝等の隣人を愛せよ」}

[ユダヤ教の排他制否定。] ← 属州（ユダヤ）総督，ポンティウス＝ピラト処刑。[皇帝ティベリウス時代]

12 使徒（直弟子）の伝道。{キリスト（救世主）の復活思想}

1 世紀後半・2 世紀前半にユダヤ戦争勃発（ローマ帝国への反乱）→ディアスポラ（亡国の民へ）

『旧約聖書』…ユダヤ教の教典（ヘブライ語で記述）

『新約聖書』とともにキリスト教の教典，ヨーロッパの思想や芸術活動の源泉

空欄解答（古代オリエント）]

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,
9,	10,	11,	12,
13,	14,	15,	16,
17,	18,	19,	20,
21,	22,	23,	24,
25,	26,	27,	28,
29,	30,	31,	32,
33,	34,	35,	36,
37,	38,	39,	40,
41,	42,	43,	44,

【オリент統一国家の出現】

【 [1] 王国（前 8 世紀～前 612）】 [徹底した武断主義による国家。]

前 2000 年頃、メソポタミア（アッシェル）に建国。前 15 世紀にミタンニ王国に服属。

鉄製武器と戦車・騎兵で諸国を征服『オリент最初の統一』 前 8c ボリス成立，前 770 東周（春秋時代）

国内を州にわける→総督の派遣→重税と圧政（服属民の反抗）

前 732 年，アラム王国征服（商人を保護し，アラム語を公用語とする）

サルゴン 2 世（前 722～前 705） [帝国最盛期。軍事的征服と重税，強制移住政策。]

∴ 前 722 年，イスラエル王国滅亡。

センナケリブ治世期 [2 (ティグリス川上流)] に遷都（前 681）

エサル＝ハドン {前 671 年 ([3])}，エジプトを征服しオリент統一。}

アッシェル＝パニパル王（前 668～前 627） [エジプトとエラム遠征・全盛期の王]

※世界最古の大図書館設立。

{19 世紀発見＝ギルガメシュ叙事詩(ウルクの伝説的王)／ノアの洪水伝説に類似。}

∴ アッシリア王国は前 612 年に新バビロニア，メディアの連合軍により滅亡。

<エジプト（第 26 王朝）>	< [4] >	< [5] >	<メディア>
（前 609 年～前 525）	（前 7 世紀～前 546）	（前 625～前 539）	（前 8 世紀末～前 550）
ハム語系・都サイス	印欧語系・都サルデス	セム語系・都 <u>バビロン</u>	印欧語系・都イクハタ

//

∴ 最古の金属貨幣（エレクトラム貨幣）を使用！

カルデア人（アラム人の 1 派）がナボポラッサルのとき独立。

[6] 世（前 604～前 562）

前 606 年カルケミッシュの戦い（エジプト＝ネコ 2 世）

∴ 前 586 年ユダヤ（ユダ王国）の反乱平定。（バビロン捕囚）

「バビロンの栄華」

<バビロンの空中庭園

>

[城壁補修・ジググラト・空中庭園（バビロンの吊り庭）]



【 [7] (アカイメネス) 朝 (前 550～前 330) 】

ペルシア＝ザクロス山中東南部南端，ファールス（パルサ）地方からおこったイラン地域の別称

前 2000 年頃，ペルシア（イラン）人（印欧語系）がイラン高原に移住。前 7 世紀，メディアに隷属。

前 7c ～前 3c スキタイ人騎馬民族（黒海北岸）

キュロス 2 世（前 559～前 530）

[メディア（前 550 滅亡），カルデアを滅亡（前 538 年，ヘブライ人を解放。）]

寛容主義により，異民族の宗教・慣習を尊重→ユダヤ教成立

カンビュセス 2 世（前 529～前 522）

[前 525 年エジプト・エチオピアを征服しオリエント再統一]

[8] 世（前 522～前 486）

首都（行政の中心）[9]・王都ペルセポリス建設。[バビロン・エクバタナにも王宮有り。]

{西方はエーゲ海東岸・エジプトから東方はインダス川流域へ至る大領土を支配。}

※ベヒストゥーン碑文

<中央集権体制の整備> 属州制の採用 駅伝制整備 「寛大な統治方法」

全国を約 20 州に分け [10] を任命。／巡察使を派遣。（王の耳，王の目）

金貨・銀貨の鑄造。[貨幣鑄造による税制改革。フェニキア人の貿易を保護]

[11]（軍用道路）の整備。[スサから小アジアのサルデス間（約 2,550 km）]

服属異民族には慣習，宗教面で寛容主義。

∴ [12] 教（拝火教・祆教）[ユダヤ教に影響！（サタン）の思想]

[アフラ＝マズダ（善神）とアーリマン（ダエーヴァ＝悪神）の二元的哲学。]

『最後の審判』善神に味方した人の靈魂が救済

ペルシア戦争（前 500～前 449 年） [地中海の覇権をめぐりギリシアと抗争。]

{海上戦・傭兵制に弱点。※フェニキア人との関係に注意。[海上貿易を保護。]}

前 478 デロス同盟・前 453 晋の三分→前 403 戦国時代

サトラップの離脱運動などで衰え，アレクサンドロスの侵入により，ダレイオス 3 世のとき滅亡。

※イラン人の文化 領土内の諸民族の文化を統合→国際的な性格→建築・工芸に成果

ペルシア文字…楔形文字を表音化

[空欄解答（オリエント統一国家）]

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,

イラン文明の興隆（アレクサンドロスの遠征（前 334～前 324）後）

※セレウコス朝シリア（前312～前63）・プトレマイオス朝（前304～前30）の影響

前 3 世紀半ば [1] アルサケス（遊牧イラン人の族長）カスピ海東南に建国

前 2 世紀半ばメソポタミア併合→都、クテシフォン（東西貿易の利益を独占して繁栄）

前 1 世紀頃からアラム語表記のペルシア語が公用語となり、ギリシア語文化圏から離脱

1 世紀以降…イラン伝統文化の復活→ギリシア・イラン両方の神々を崇拝

【 [2] 朝（224～651）】

224 年、ササンの孫のアルダシール 1 世がパルティアを破り、建国。 都、 [3]

ゾロアスター教の祭祀の家柄 アケメネス朝の後継者を自認

2 代、 [4] 世 { ローマと抗争し軍人皇帝ウァレリアヌスを破る(260)
(位 241～272) クシャーナ朝を攻撃。インダス川西岸まで進出。

∴ 5 世紀になりローマとエフタル [イラン, トルコ系? (白匈奴)] が圧迫。

[5] 世 { ○東ローマ皇帝 (ユスティニアヌス 1 世) と戦いアンティキアを占領し、黒海へ進出。
(位 531～579) [562 年, 50 年間和平条約締結。] ※ササン朝の絹を嫌い、自ら絹織物を生産
○558 年頃, [6] と組んで [7] を討伐。

《ササン朝の宗教政策》[ササン朝は神権的専制君主国家でありながら多くの異端, 異教乱立に注意。]

○ゾロアスター教が国教的地位 = 「 [8] 」整理 [終末観・最後の審判・救世主思想] ※祆教

○ [9] 教 [3 世紀, 教祖マニ (ゾロアスター教にキリスト教, 仏教を融合)]

東方への影響 = ソグド人, ウイグル人を経て中国へ [唐の則天武后時代に伝来。長安に大雲光明寺建立。]

西方への影響 = カルタゴ生まれの有名な教父アウグスティヌス は元マニ教徒「告白録」

中世キリスト教の異端 [10] 派もマニ教の流れを受ける。

※12, 13 世紀南仏で流行した アルビジョワ派は十字軍まで派遣さる [フィリップ 2 世～ルイ 9 世]

{ ○ [11] 派キリスト教 {422 年テオドシウス 2 世とワララン 5 世との間でササン朝領内のキリスト教自由承認は成立。}

431 年, エフェソス公会議でネストリウス派異端 となる [←→アタナシウス派 (三位一体説)]

ササン朝の保護から中央アジアを経て中国へと伝播する。 [12] [781 年 大秦景教流行中国碑]]

637 年, ヤズデギルド 3 世の時イスラム軍にクテシフォンを占領され, 642 年, ニハーヴァンドの戦いで敗れる。

※建築・美術・工芸の発達…銀器・ガラス器・毛織物・彩釉陶器の技術 東方…中国 (南北朝・隋・

唐) から朝鮮・日本 (飛鳥・奈良時代) へ伝播 日本代表例…法隆寺の獅子狩文錦, 正倉院校倉の漆

[空欄解答 (ササン朝ペルシア)]

1,	2,	3,	4,	5,	6,
7,	8,	9,	10,	11,	12,

古代インド世界

【 [1] 文明 (前 2600 頃～前 1800 頃) 】

ドラヴィダ系 (地中海方面から移住?) による形成 [∴ 現在南インドに定住。]

- { [2] [パンジャブ地方 (インダス川中流)]
[3] (死者の丘) [シンド地方 (インダス川下流)] ※ドーラヴィーラ

○ [4] 文明・彩文土器の使用。 王宮, 神殿の跡なし。

○都市計画 [東西南北直交道路・排水溝 (焼き煉瓦を使用。=水洗トイレ) に特色 ※ 浄・不浄の概念。]

○印章文字 (インダス文字) [象, 犀, こぶ牛, 一角獣など。 ※ 牡牛の崇拝] 未解読。

《 [5] 人の侵入 (カイバル峠越え) 》 ∴ インダス文明崩壊は洪水説が有力。

※インドヨーロッパ語系の牧畜民 (前 2000 年頃, 南西イラン高原へ)

第一次移動。 [前 1500 年頃にかけて馬により先住民を支配。]

多神教社会 [6] = ヴェーダ (聖典, 知識の意) [前 1200 年頃, 成立。数々の戦いの記述。]

∴ 4 ヴェーダ { 「サマ=ウエダ」 「ヤジュル=ウエダ」 「アタルウ=アウエダ」 }

前 1000 年頃, 鉄器が普及

第二次移動 [前 1000 年頃, [7] 川流域にまで進出 (人口増加で, 肥沃な土地へ)]

∴ 農業生産力の上昇と奴隷の増大が, 社会の階層化・固定化を進行 → 小都市国家群の発生。

アーリヤ人, 移動した土地で先住民と交わる → 定住農耕社会を形成

道具の変化: 青銅器 → 森林開墾に適した [8] 道具・牛が引く木製犁の使用

稲の栽培などの余剰農産物 → 生産に直接従事しない司祭, 武士階級が出現

○ [9] 制度の成立。 { ∴ 出生 (ジャーティ) ・古代的身分制 (ヴァルナ=色) }

{ バラモン (司祭) クシャトリヤ (武士) ・ヴァイシャ (農民, 商人) ・シュードラ (隷属民) }

※カースト (ポルトガル語の血統) … 17 世紀支配期 = 拡大再編成, 家系や職業以外, 様々な社会集団を指す

○ [8] 農具など農業技術の発展により, 農業生産力の増大。

[10], ヴァイシャの台頭 → バラモン中心社会に対する不満 (カースト否定の論理へ)

※前 600 年頃, [11] 「奥義書」 [バラモン教の内部的革新運動]

[ブラーフマナ (梵) {宇宙の根本原理}・アートマン (我) {個人中心生命} 合一

= 梵我一如 (バラモン教の祭式至上主義に対する批判)] ※輪廻転生の教義 {業 (カルマ) から解脱}

『前 6 世紀, カースト否定の立場にたつ, 2 つの宗教の誕生。』

※前 6 世紀後半, ユダヤ教の成立

〈 [12] 教〉	〈 [13] 教〉
ガウタマ=シッダールタ (釈迦牟尼・釈尊) (前 563 年頃～前 483 年頃)	ヴァルダマーナ (マハ・ヴィーラ・ジナ=勝者) (前 549 年頃～前 477 年頃)
クシャトリア層などの支持 輪廻からの解脱 ハ正道による解脱。(苦行の否定) [正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定]	主にヴァイシヤ層などの支持 苦行を重視。([14] 主義) 商人へ普及 ∴ <u>西インドに現存</u> (組織化に成功)

※輪廻転生 (生死は業により無限に繰り返される)

∴ 都市国家 (16 国) は抗争, 合併の後に マガダ国・コーサラ国 などが発展。

[15] の遠征 (前 327 年～前 325 年) を契機として, 統一国家の成立待望。

【 [16] 王朝 (孔雀王朝) (前 317 年頃～前 180 年頃) 】

都, [17]

チャンドラグプタ王 (位前 317 頃～前 296 年頃) がナンダ朝 (マガダ国) を倒して建国。

西北インドからアフガニスタン方面 (セレウコス朝シリアと抗争) まで拡大

3 代, [18] 王 (阿育王) (前 268 頃～前 232 頃)

[最南部を除く, 全インド征服を達成。] ∴ カリンガ国遠征の惨禍から仏教に帰依。

仏教立国 [ダルマ (法=厳守すべき社会倫理) による統治。] を建設。

○ 磨崖碑・石柱碑の建設。(ブラーフミー文字) ※サーンチーにストウーパ (仏塔) 造営

○ 第 [19] 回仏典結集 [パーリ語經典編纂 (小乗仏教)] → セイロン島へ流布。

(王子マヒングを派遣)

第 1 回, 仏典結集 [シャカ入滅, 直後 (マガダ国, ラーシヤグーリハ)]

第 2 回, 仏典結集 [入滅, 100 年後 (マガダ国, ヴァイシャーリ)]

∴ [20] 仏教 = 11 世紀, 東南アジア (タイ・ビルマ) で流行。

[個人の解脱・戒律重視などが特色。 ∴ 大衆部仏教]

アショーカ王の死後, 50 年で滅亡 [∴ アフガニスタン北部の民族興亡]

= { 前 3 世紀半ば, バクトリア成立 ← トハラ (大夏) ← 前 1 世紀頃, 大月氏 }

【〔 21 〕朝（貴霜王朝）（1 世紀～3 世紀）イラン系クシャーナ人〔大月氏から自立〕
都，〔 22 〕〔現パキスタンのペシャワール〕

西トルキスタンより西北インド。カトフィス 1 世の建国。〔∴カトフィス 2 世は後漢の班超軍と抗争。〕

3 代，〔 23 〕王（位 130 年頃～170 年頃）ガンジス川中流域まで拡大。

中国とローマを結ぶ交通路の要衝国際的な経済活動，大量の金貨発行

（貨幣に刻まれたイランやギリシア，インドの文字や神々）＝東西交流発展を示す

○第〔 24 〕回仏典結集〔サンスクリット語經典編纂。〔 25 〕仏教（北伝）〕

∴理論的に発展。〔2 世紀，ナーガールジュナ（竜樹）「中論」〕菩薩信仰による大衆救済

自分より他者の救済を優先

○〔 26 〕美術〔バクトリア時代進出のギリシア人（ヘレニズム文化の影響）〕

＝仏像作製（ガンダーラやマトゥラー中心）3 世紀半ば，ササン朝ペルシアの圧迫で王朝が滅亡。

【※〔 27 〕（アーンドラ）朝（前 1 世紀～後 3 世紀）】

ドラヴィダ系アーンドラ族の王朝 都，フラティシュターナ（現パイタン）

1 世紀半頃ローマとの季節風〔モンスーン＝夏（南西風）冬（北東風）〕貿易で繁栄。

ローマの金貨・銀貨の流入，絹布・胡椒・宝石などを輸入 『エリュトウラー海案内記』

バラモン教を信仰し，ヴァルナ制を堅持。（仏教やジャイナ教も流行。）

【〔 28 〕朝（320 年頃～550 年頃）】

チャンドラグプタ 1 世（位 320 年～335 年頃） 都パータリプトラ（現パटना）

※天文学・数学の発達（十進法やゼロ(0)の概念（前 2 世紀発見）など）

3 代〔 29 〕世（超日王）（位 376 年頃～414 年頃）南インドを除く大半を征服。

○〔 30 〕文学の流行 宮廷詩人カーリダーサ（5 世紀）「シャクンタラー」

（インド古典文化） 「マハーバーラタ」「ラーマヤナ」二大叙事詩，完成。

○仏教〔大乘仏教（菩薩信仰）確立〔無着（アサンガ）・世親（ヴァスバンダナ）兄弟等の活躍。〕〕

〔 31 〕様式 { アジャンター石窟寺院（仏教関係） ∴北魏に影響

〔 32 〕的様式 { エローラ石窟寺院（仏教，ヒンドゥー教，ジャイナ教の寺院）

∴〔 33 〕（東晋）（5 世紀初頭，陸路→海路）の来朝。「仏国記（法顕伝）」

∴〔 34 〕僧院（5 世紀～1200 年頃）〔4 代，クマラグプタ 1 世の創建〕

○〔 35 〕教--- バラモン教の教義を基礎として民間信仰などを加えたもの。

{4世紀以前＝バラモン教，4世紀以後＝ヒンドゥー教と理解する。}

教祖，統一した教義なし。多神教的要素＝偶像崇拜

{インド人の宗教＝インド的 (Hindo) }

∴クリシュナ神

{
シヴァ神 (破壊)
ヴィシュヌ神 (維持・太陽)
ブラフマー神 (創造)

『マヌ (サンスクリット＝人・ヴァエダ＝人類の祖) 法典』が完成。(前2世紀～後2世紀)

[商業の衰退により農業中心の生活規範 (各ヴァルナの権利・義務) がここで定着。]

←500年頃，エフタルが北インドに侵入。550年頃，内乱などから滅亡。

【 [36] 朝 (606～647) 】 都，カナウジ

ハルシャ＝ヴァルダナ (戒日王) (606～647) [1代限りの王朝 (後継者は不明)]

○仏教を保護。[37] の来訪。(629～645) ハルシャ王と会見。『大唐西域記』

※ [38] の来訪 (671～695) 共にナーランダー僧院を訪問。[現ビハール州]

『南海寄帰内法伝』(スマトラ島の [39] 王国で著作)

<北インド> 地方勢力に分裂，ラージプート諸王国

(プラティーハーラ王国8c～11c・チャーハマーナ王国10c末～12c末) の台頭

11世紀初～イスラーム勢力の侵入

<南インド>

ドラヴィダ系住民の独自の世界が存在 紀元前後から，タミル語の文芸活動が興隆

○チョーラ朝 (前3～後13世紀) 南インドのドラヴィダ系タミル人の王朝

ローマ帝国の衰退→インド・東南アジアから中国へ大量の香辛料が輸出

○パーンディヤ朝 (前3世紀頃～後14世紀) インド南端の王朝，首都マドゥライ。

前1c末ローマ皇帝に使節を派遣

○チャールキヤ朝 (6～8世紀) デカン高原から南インドを支配したドラヴィダ系

○シンハラ王国 (前5世紀頃王国形成～19世紀初頭)

アーリヤ系のシンハラ人がセイロン島に移住して建国 前3世紀以降，上座部仏教の布教中心

[空欄解答 (古代インド)]

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,
9,	10,	11,	12,
13,	14,	15,	16,
17,	18,	19,	20,

21,	22,	23,	24,
25,	26,	27,	28,
29,	30,	31,	32,
33,	33,	34,	35,
36,	37,	38,	39,

イスラーム世界

606 年, ハルシャ=ヴァルダナ王即位 618 年, 唐の成立

ビザンツ帝国とササン朝との激しい争いから, シリア・メソポタミア・ペルシア経由の交通路が困難となる。インド洋, 紅海, アラビア西海岸(ヒジャーズ) 経由の中継貿易へ。

[メッカ, メディナ発展] ローマと南インドの中継地, 南アラビア地方(イエメン) 以外に注目。

5 世紀末, [1] 族のメッカ支配(ベドウィンの地に商工業が発展)

隊商貿易, カーバ(方形) 神殿の巡礼

(当時は原始アラビアの偶像崇拜の地) で繁栄。]



<アッラーの啓示>

ムハンマド(マホメット)とイスラーム教

∴ ササン朝時代に一神教信仰の流行。(ネストリウス派の影響)

クライシュ族ハーシム家出身の孤児,

[2] (570 頃~632) は幼くして隊商に従事。[ユダヤ教, キリスト教に接触。]

↓

40 歳の頃, メッカ郊外のヒラ山中で, 神([3]) の啓示をうく。

610 年イスラーム教創始 [15 歳年上の妻ハディーシャの精神的支え(一男子夭折, 四女子)]

○偶像崇拜の否定。 ○唯一神アッラー(神官なし) ○政教一致

○ユダヤ教徒, キリスト教徒は [4] [ムハンマドは最後にして最大の預言者]

『旧約聖書』『新約聖書』…イスラーム教にさきだつ神の啓示の書

○六信五行 { 信仰=神・天使(マラク)・経典{クルアーン(コーラン)}・預言者・来世・天命
勤行=告白(信仰)・礼拝・断食(ラマダーン)・喜捨(ザカート=救貧税)・巡礼

619 年, ハディーシャの死(悲しみの年)

偶像否定, 貧民への平等意識の主張(富の独占批判) からクライシュ族の迫害を受ける。

[5] 年, 聖遷([6]) ムスリム共同体を建設

マディーナトン・ナビー「預言者の町」=[7] (ヤスリブ=ユダヤ教徒の地)

∴ 7 月 16 日, イスラーム歴の起源

太陰暦のため季節と月のずれが起こる。当初は, ユダヤ人と共にエルサレムに礼拝して後にメッカの

カーバ神殿へ向かう（ムハンマドがメディナに到着したのは9月24日）

〔 8 〕（聖戦）の始まり。「剣か、コーランか、貢納か。」※18c 歴史家ギボン
〔未亡人、孤児救済のため＝一夫多妻制の由来〕〔旧統治体制より軽く異教徒も受容した〕

〔 9 〕（人頭税）・〔 10 〕（地稅）}

630年、メッカ占領。→ムハンマドの死までに〔 11 〕統一。

正統カリフ時代 都メディナ カリフ（後継者）制度…信徒間の選挙により選出

1代 アブー＝バクル（632～634）〔マホメット死後の離反者討伐の時代。〕

2代 〔 12 〕（634～644）〔大征服時代の到来。〕

ヘラクレイオスⅠ世からシリア（635年）・パレスチナ（638年）・エジプト（642年）獲得。
642年ニハーヴァンドの戦いでイラン（9年後ササン朝滅亡）・イラクを支配 イスラーム暦採用。

3代 ウスマーン（644～656）〔ウマイヤ家出身者 ∴コーランの編纂が完成。〕

4代 〔 13 〕（656～661）〔ムハンマドの従兄弟であり〔 14 〕と結婚。〕

クーファに遷都 ※シーア派の祖〔シーア・アリー＝意味はアリーの党派（初代イマーム）〕

シリア総督〔 15 〕と抗争〔657年スィフイーン戦の戦い後、ハワーリジュ派（離脱派）の分離。〕

ウマイヤ朝（661～750）

シリア総督であった〔 16 〕（661～680）が〔 17 〕に成立。

○選挙カリフ制から〔 18 〕カリフ制へ（子、ヤズィードへカリフを継承。）

∴アリーの長男ハサン・次男フサイン〔680年、カルバラの戦いで死亡。〕

※〔 19 〕派（現在のイスラーム教との90%）とシーア派の対立。

○アラブ至上主義 { 非アラブ以外の官僚追放。 アラビア語の公用語化
アラブ貨幣の鑄造〔ディナール金貨、ディルハム銀貨〕

征服地の先住民…地租（ハラージュ）・人頭税（ジズヤ）を負担→改宗者も免除されず

5代アブド＝アルマリク（685～705）〔691年、岩のドーム（ムハンマド昇天の地）建設。〕

6代ワリードⅠ世（705～715）〔ウマイヤ朝最盛期〕

『単一王朝で最大の領土。』 ※ビザンツ帝国に対するコンスタンティノープル包囲。

①〔674～678〕←→コンスタンティノス4世

②〔717～718〕←→〔 20 〕世（717～741）「ギリシア火」で抵抗。

∴726年、聖像崇拜禁止令〔キリスト教の浄化・対イスラーム政策〕

東方 = { アフガニスタン・中央アジア方面は、サマルカンド（712年に占領）を含む
〔 21 〕（社会的影響はなし）まで至る。

{ 西方 = アフリカ北岸を西進し、〔 22 〕人を征服・同化しつつ、ジブラルタルを越え、

[23] に至る。

711 年, 西ゴート王国を征服後, 732 年にはピレネー山脈を越え, フランク王国に侵入。

[トゥール・ポワティエ間の戦い (メロヴィング朝宮宰 [24]) に敗北。]

“マホメットなくしてシャルルマーニュ (カル・チャールズ) なし” アンリ=ピレンヌ「ヨーロッパ世界の成立」

領土の拡大とともに [25] (アラブ以外のイスラーム改宗者) の反感が高揚。

アッバース朝 (750~1258)

751 年タラス河畔の戦い・755 年安史の乱

アッバース朝革命 [アラブ帝国→イスラーム (サラセン※古代西欧ではアラブ人をサラセン人と呼ぶ) 帝国]

アブー=アルアッバース [称号サッファーフ (マホメットの叔父, アッハーフの子孫)] 750 年ザーフ河畔の戦いで勝利。

[マワリー解放運動+シーア派 (ホラサーン地方のイラン人) の協力。]

- アラブの特権廃止 (征服地の [26] 課税)
- マワリーの [27] 廃止 公用語はアラビア語であっても民族差別撤廃

※751 年, [28] 河畔の戦い (唐の高仙芝) [捕虜により製紙法の伝来。]

2 代, [29] (754~775)

[バグダード (マディーナ=アッサラム「平安の都」) の建設=762 年に遷都]

5 代, [30] (786~809) [全盛期] ティグリス川西岸<バグダード>

∴カール大帝 (後ウマイヤとビザンツ帝国に対峙) と使節交換。

7 代, マームーン (813~832) ∴ バイト=アル=ヒクマ「知恵の館」創設。

カリフの政治…9 世紀頃イスラーム法 (シャリーア) にもとづいて実施

アラブ中心主義 { 国家体制として中央に宰相=ワジール, 地方に総督=アミールを置き イラン人官僚登用。 }

の緩和 9 世紀末には トルコ軍人 (奴隸=マムルーク) も大量に採用。

- <衰退過程> ターヒル朝 (イラン系)・エジプトのトゥールーン朝 (トルコ系) の独立。
- 946 年には [31] 朝が, 1055 年には セルジューク朝 が入城し, 国力は衰退する。
- 1258 年, [32] の率いるモンゴル軍により滅亡する。

西アジア社会…古代から貨幣使用→イスラーム時代, 貨幣経済より発達

ウマイヤ朝・アッバース朝政府…カリフ権力強大, 官僚制整備

- 租税…都市や農村から貨幣と現物の二本だてで徴収
- 俸給…予算にもとづき官僚や軍隊に現金支給 アター (俸給・年金=ウマルが制定)

[空欄解答 (イスラーム教の成立と発展)]

1, _____ 2, _____ 3, _____ 4, _____
5, _____ 6, _____ 7, _____ 8, _____

9,	10,	11,	12,
13,	14,	15,	16,
17,	18,	19,	20,
21,	22,	23,	24,
25,	26,	27,	28,
29,	30,	31,	32,

カリフの鼎立とイスラーム世界の拡大

後ウマイヤ朝（756～1031）〔西カリフ帝国〕

∴「ローランの歌」〔フランク王国（カール大帝）とピレネー山脈南部で抗争。〕

アブド＝アッラフマーンⅠ世「クライシュ族の鷹」都〔Ⅰ〕 ∴トレド（スペイン中部）にも注意！

8代、アブド＝アッラフマーンⅢ世の時、929年にカリフを称す。∴イスラーム文化のヨーロッパ伝播の地。

ファーティマ朝（909～1171）〔中カリフ帝国〕

※ファーティマ＝3代イマーム、フサインの母、ムハンマドの直系

〔イスマーイール派＝7代イマーム派〕史上初のシーア派国家＝イドリース朝（モロッコ）

〔Ⅱ〕〔アグラブ朝（800～909）滅亡〕に成立し、969年エジプトを征服。

ウバイド＝アッラー 都〔Ⅲ〕〔（カーヒラ＝勝利の町）972年に遷都〕 ※アズハル学院

紅海の交易圏をおさえ、シチリア島も支配（紅海ルート） Ⅱc 東方貿易（イタリア諸都市）

イスラーム世界の拡大 『イラン系王朝』

サーマーン朝（874～999）都ボハラ（ブハラ） 〔Ⅳ〕派

ナスルⅠ世 〔イラン人最初の王朝〕 ∴ターヒル朝（820～873）

〔アッバース朝カリフに忠誠、中央アジアにてアム川一帯支配。〕

〔アッバース朝におけるトルコ人奴隷（〔Ⅴ〕））中継貿易の地。

〔Ⅵ〕（アヴィケンナ）の出身地

〔イラン系医師＝「医学典範」・アリストテレス研究＝「治癒の書」〕

トルコ族の傭兵、シーア派の台頭により衰退。←〔Ⅶ〕朝により滅亡。

ブワイフ朝（932～1055）〔Ⅷ〕派（12イマーム派）軍事政権

アブー＝シュジャー＝ブワイフ〔カスピ海西南部から全土へ発展。∴ダイラム人の建国。〕

945年、バグダードに入城。カリフ宮宰として100年余り政権をとる。（大アミールの称号）

〔Ⅸ〕制の施行。

土地の徴税権を軍人に付与し、俸給にみあう金額を直接農民や都市民から徴税させる

←〔Ⅹ〕朝（大セルジューク）のバグダード侵入により滅亡。

『トルコ系王朝』 カラ=ハン朝 (10世紀半ば～12世紀半ば頃)

[11] での最初のトルコ系イスラーム国家

サーマーン朝を滅ぼしボハラを占領。東西トルキスタン支配 (ヘラサグン地方=チュ=川流域)

{ 分裂的傾向強くガズナ朝, 後にはセルジューク朝の干渉の末, 11世紀末属国化となる。 }

1047年, シル川 { 東カラハン←1132年 [12] [西遼 (耶律大石)] により滅亡。

で分裂 { 西カラハン←1212年, ホラズムにより滅亡。

ホラズム朝 (フーリスム 1077～1231)

10世紀末の成立だが, 11世紀ガズナ朝の攻撃で衰退。

西トルキスタン支配。[[13] ・ダリア (川) 下流域一帯。]

1077年, セルジューク朝の征服を脱して以降強国になる。(カラキタイと対峙。)

1215年, [14] 朝を滅ぼしてアフガニスタンを征服。

[一時的に大帝国に発展 = [15] に遷都。]

←1220年, [16] =ハンが征服し, 1231年に滅亡。[一派は国王を追い南ロシアまで遠征。]

∴この地は後, [17] の支配となる。

セルジューク朝 (1038～1157) (スンナ派)

サーマーン朝とカラ=ハン朝の争いの最中, ホラサーン地方へ進出。

トゥグリル=ベク建国 [1055年バグダードに入城。1058年 [18] の称号を得る。]

アルプ=アルスラン (1063～1072) [[19] , シリア, パレスチナに進出。]

[1071年, マンジケルトの戦いでビザンツ軍をアナトリア (小アジア) 東部で破る。]

セルジューク朝黄金時代 3代マリク=シャー (1072～1092) 「政治の書」

∴イラン人宰相, [20] (1019～1092)

○ イクター制が西アジアに普及。

○ [21] 学院の創設。(マドラサ)

{ ガザーリー (ラテン名アルガゼル) [スーフィー思想 (イスラーム神秘主義)]
ウマル=ハイヤーム 「ルバイヤート (四行詩集)」 ∴ジャラリー暦 (太陽暦)

∴ルーム=セルジューク朝 (1077～1308) (都コニア) } を忘れずに!

[1096年, 十字軍が始まりシリアの貿易路が衰退し, 逆にサマルカンドを中心とした, 中央アジアの貿易が活発化することにより, モンゴル族の勢いが増すことになる。]

《13世紀モンゴル族発展 (西←東)》

ナイマン部, ホラズム ←—— チンギス=ハン西征 (1219～1224)

1258年, アッバース朝滅亡。←—— フラグ (兄4代, モンゲ=ハンの命) の西征 (1253～1258)

イル=ハン国 (1258～1353)

都, [22]

兄、フビライの宗主権を支持し、オゴタイ・チャガタイ＝ハン国と対峙。
 宗教政策に寛容なため、キリスト教国と交流（マムルーク朝と対峙！）があり、
 多数の宣教師・商人（マルコ＝ポーロなど）がここからインド・中国へ向かう。

7代、[23]＝ハン（1295～1304）の時、イスラーム教を国教とする。

モンゴル統治下におけるイラン・イスラーム文化の成熟。
 イランにおけるシーア派の定着化。 ※ラシード＝ア（ウ）ッディーン「(蒙古)集史」

イベリア半島・北アフリカのイスラーム勢力

[マグリブ（西方イスラーム世界）のイスラーム国家。 ∴1031年、後ウマイヤ朝滅亡。]

レコンキスタの活発化。地中海のノルマン人の活躍による危機！

※【アグラブ朝（800～909）】

イラン人のアミールがアッバース朝の宗主権の下、チュニジアで自立。
 909年にファーティマ朝により滅亡。

ムラービト朝（1056～1147） ベルベル人国家
 スンナ派イスラーム教国家 都、[24]のマラケシュ
 北アフリカ（モロッコ、アルジェリア）・スペイン（アンダルシア地方）を支配。
 ※＜サハラ砂漠以南のイスラーム国＞[ニジェール・セネガル川上流域。]

ガーナ王国（7世紀頃～1150） マンディンゴ人建国。首都、クンビ＝サレー

サハラ縦断貿易で繁栄（金と塩の交換） 11c以降イスラーム化（1076, 77年ムラービト朝の攻撃で衰退）

マリ王国（1240～1473） 都ニアニ 黄金の都、[25]の繁栄

マンサ＝ムーサ（カンカン＝ムーサ）の時全盛。

[メッカ巡礼（1324～1325）は有名。（カイロで金大暴落）]

∴この地に[26]も訪問。（1352年）

[27] **王国（1464～1591）** 都ガオ [最大領土のイスラーム国家]

モロッコ遠征軍（サード朝・マンスール王）の銃により滅亡。

ムワッヒド朝（1130～1269） 都、マラケシュ

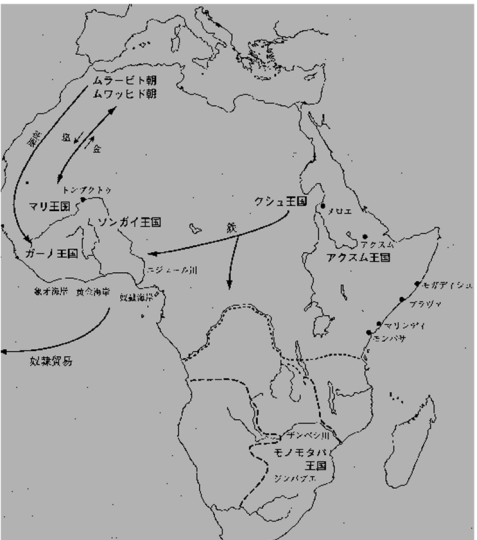
チュニジア以西の北アフリカと半島南部。

＜学問・芸術の地として繁栄。＞

[28] （ラテン名＝アヴェロエス）

[コルドバ出身、アリストテレス哲学研究で有名。]

ナスル朝（グラナダ王国）（1232～1492）



[29] 宮殿で有名。アラベスク模様

<※レコンキスタ（国土回復運動）の過程>

11世紀，十字軍とともに運動激化。

→12世紀，半島北部占領→1236年，コルドバ占領

→[30] 年，グラナダ陥落。

ファティマ朝以降のエジプトのイスラーム国家

アイユーブ朝（1169～1250） イラクのクルド族の武将が建国。

ラテン名 = [31] （サラーフ＝アッディーン）建国

[32] 派 [北アフリカからシリア，アラビア西海岸に至る地域を支配。]

1187年，[33] 王国滅亡。（無血解放。）→第3回十字軍の派遣の契機。

フリードリヒ1世[赤髯王（1190年事故死）]・フィリップ2世[尊厳王（途中で帰国。）]

リチャード1世[獅子心王（1192年，サラディンと休戦条約を締結して終結。）]

○第5回・6回十字軍とも抗争。

[∴サラディンは1193年に死亡。]

マムルーク朝（1250～1517） トルコ軍人奴隸（アイバク）による建国。

第6回・7回十字軍 仏 [34] 世[∴対イスラーム政策のためルブルックをカラコルムに派遣。]

5代，スルタン，バイバルス（位1260～77）[モンゴル軍（イル＝ハン国）を撃退。]

モンゴル軍撃退，[35] 家カリフをカイロに擁立，メッカ・メディナを保護

※アイユーブ朝～マムルーク朝中期のエジプト

農業の発展 ナイル川の順調な増水 →小麦・大麦の生産向上・サトウキビ栽培の普及

地中海・インド洋貿易の利潤独占→首都カイロ，イスラーム世界の政治・経済・文化の中心地として繁栄

経済的没落。{ 15世紀末，ヴァスコ＝ダ＝ガマのインド航路発見により地中海貿易の衰退。

{ 1509年，ディウ沖の戦いでポルトガル軍に敗北し，インド洋制海権を喪失。

1517年，[36] （セリム1世）により滅亡。

[∴スルタン＝カリフ制（アッハース家カリフから継承。）の由来となる]

インドへのイスラーム勢力侵入

∴8世紀初頭，ウマイヤ朝の侵攻 [ムハンマド＝ビン＝カシムがシンド地方征服（社会的影響なし）]

ガズナ朝（962～1186） トルコ系

サーマーン朝のマムルーク（アルプテギーン）による建国。

スルタンと自称したマフムード（998～1030）の時，全盛期。

サーマーン朝の衰亡に際し，カリフ（アッバース朝）からホラサーン地方とガズナ地方の統治権を授与。

10世紀末より，〔 37 〕に軍事侵攻を繰り返す

←→ヒンドゥー諸勢力（ラージプートと総称）→内部分裂で対抗できず

イラン叙事詩 { フィルドウーシー「シャー＝ナーメ（王の書）」 [近世ペルシア語の父] }

←セルジューク朝・ゴール朝の圧力により滅亡。

ゴール朝（1148～1215） イラン系と自称

1186年，〔 38 〕朝を倒して，全アフガニスタンを支配。

ムハンマド＝ゴーリー（位 1174～1206）→1192年，西北インド進出成功。

∴インド支配〔〔 39 〕〕（1206年，自立＝奴隸王朝）

内紛により，13世紀初頭衰退。

←1215年，〔 40 〕（＝シャー）朝により滅亡。

〔空欄解答（イスラーム世界の拡大）〕

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,
9,	10,	11,	12,
13,	14,	15,	16,

17,	18,	19,	20,
21,	22,	23,	24,
25,	26,	27,	28,
29,	30,	31,	32,
33,	33,	34,	35,
36,	37,	38,	39,
40,			

インドへのイスラーム化

デリー=スルタン朝 (1206~1526) 都, デリー (ジャムナ河畔)

◇ [1] 王朝 (1206~1290) クトゥブ=ウッディン=アイバク ∴ トルコ系国家 [以下 4 王朝とも同様。]

[インド初の本格的イスラーム国家] エジプトのマムルーク朝の創始者名もアイバクである。

※北インド中心にイスラーム教の浸透。[[2] の活躍に注意!]

◇ ハルジー朝 (1290~1320) {地租の金納化など経済改革実施→ムガル帝国の経済政策へ}

◇ トウグルク朝 (1320~1414) { イブン=バットウータの来訪
← 1398 年 [3] 軍のデリー攻撃後, 衰退。

◇ サイド朝 (1414~1451) [支配領域はデリーの近郊に限定。]

◆ ロディー朝 (1451~1526) [4] 系ロディー族 (バハロール) による建国。

※アフガン人 (他称) パシュトゥーン人 (自称)

※ ヴィジャヤナガル王国 (1336~1649) [南インドのヒンドゥー教国]

海上貿易で繁栄 (宝石, 香料の製造)

{ [5] の南海遠征 [15 世紀初頭・永楽帝の命で朝貢促進を目的。]
ヴァスコ=ダ=ガマのカリカット到達。[1498 年]

ムガル帝国 (1526~1858)

[6] (1526~1530) ティムールの子孫 (5 世代を経る) と称す

[ウズベク族に追われて北インド侵入。] 『バーブル=マーナ』回想録

{シャイバニ=ハン→1500 年, サマルカンド征服・1507 年, ヘラート征服}

1526 年, ロディー朝を [7] の戦いで破る。 都, デリー

ガンジス川へ進出し北インド支配。 2 代, ハムイーン (1530~1556) の時, 政情はまだ不安定。

{ ∴ スール朝 (1539~1555) [アフガン系国家。シェール=シャー (1539~1545)] }

1540年ムガル皇帝を追放（1555年デリー奪回）し北インド支配〔行政・徴税制度はアクバルに継承〕

3代、アクバル（1556～1605）〔8〕に遷都。

中央集権的な統治機構整備＝全国を12州に分割し、領主の強大化防止。

〔州・県・郡に分け、州知事を派遣。（封地や徴税権ではなく給料を支給）〕

土地測量による税制改革〔4等級に分類。〕

軍事的発展・農民支配のためザミンダール〔ラージプート族多数（ペルシア語で「地主」）を官僚組織に統合もしくは抑制。

〔9〕制（位階制）…官僚に維持すべき騎兵・騎馬数とそれに応じた給与・官位を授与

<イスラーム・ヒンドゥー融和策>

○自らヒンドゥー王女と結婚。 ○ラージプート族の〔10〕廃止。

○神聖宗教を創始。〔ディン=イラーヒー 折衷宗教。入信者なく失敗。〕

4代、ジャハーンギール（1605～1627）〔アグラ中心にムガル文化隆盛。〕

5代、〔11〕（1627～1658）



∴〔12〕廟〔アグラ〕〔愛妻ムムターズ＝マハルへの追慕。白大理石・左右対象〕

帝国の最盛期。〔西欧諸国との貿易で繁栄。〕1648年、デリーに遷都。 1649年、ウイジャナガル王国滅亡。

6代、〔13〕（1658～1707）

{ デカン高原まで拡大し、最大領土を形成。〕 イスラーム化政策を強硬。熱烈にスンナ派を信仰。〕
1679年 ヒンドゥー教徒のジズヤ復活、ヒンドゥー寺院破壊〔宗教的圧迫は帝国の衰亡促進。〕

ラージプート族・マラーター族結束

〔18世紀前半 マラーター同盟（1674年マラーター王国、シヴァージーが創始するが死後衰退）〕。

∴〔14〕教徒 15～16世紀、新しい信仰の誕生

カビール…不可触民差別を非難→人類が根本的に一つであることを説く

〔15〕（シク教の開祖）…愛と献身により神とともに生きる

カーストの区別ない解脱の可能性を説く

{ 折衷的宗教その後、軍事的集団化。∴ヒンドゥー教にイスラーム教の要素を導入。

唯一神ハリ（真理）への帰依。パンジャブ地方のアムリットサル。

人間の絶対的平等を主張。〔偶像崇拝、カースト制の否定。〕

10代グル（教主）〔ゴーヴィンド＝シング（1675～1705）以来、教団の軍事化進行。〕

∴髪・髭を切らず、短剣と腕輪を付け、ターバンを巻く風貌に特色。

※インド＝イスラーム文化〔イラン＝イスラーム文化とヒンドゥー文化との融合。〕

○〔16〕語〔ヒンドゥー語口語文法を基盤。アラビア語、ペルシア語が混成。〕

ムガル宮廷＝ペルシア語 {ウルドゥー語＝現パキスタン共和国の公用語。ヒンディー語＝現インド共和国公用語。}

- 絵画 { ムガル絵画 [宮廷での肖像画 (ミニアチュールにインド的要素が加わる。)]
ラージプト絵画 [士侯の保護によるインドの伝統・神々を題材とした庶民的絵画]

※ヨーロッパ勢力のインド進出。(16世紀のポルトガルは前述。)

英＝1600年東インド会社設立→1639年、マドラスの租借→1661年、ボンベイ獲得

→1690年、カルカッタ建設

仏＝1604年東インド会社設立なるも一時的閉鎖→1664年会社再建(コルベール重商主義)

→1672年、ポンディシェリ建設。→1673年、シャンデルナゴル建設。

13世紀～16世紀のインド以西のイスラーム勢力

ティムール朝(1370頃～1507) 都, [17] スンナ派

14世紀後半, チャガタイ＝ハン国分裂。←西チャガタイの武将, ティムール(位1370～1405) 台頭。

[チングス＝ハンの末裔と称す。(∴移住して, 5世代目＝トルコ化)]

※征服過程をおさえる。東チャガタイ＝ハンも支配した後, ソグディアナへ発展。



<ティムール>

→(旧)イル＝ハン国の地を支配

→[1395～1396年, キプチャク＝ハン国従属。(ザイ攻略)]

→[西北インド侵入。(1398年, トウグルク朝, デリー略奪。)]

→[小アジアへ進出。{1402年, [18] の戦いでオスマン帝国(ハジャット1世)敗北}]

→征明[永楽帝時代]途上, オトラルで病死。[元を追放した報復。]

サマルカンド(東西貿易の最大仲介市場)を中心としたイラン＝イスラーム文化発展[ヘラートに遷都。]

4代ウルグ＝ベク(1447～49) 天文台建設

1500年, トルコ系 [19] 族侵入。[シャイバニ朝(1505～1599)]

中央アジアのウズベク3国 { ボハラ(ブハラ)＝ハン(1505～1920) [ウズベク＝ハン国]
ヒヴァ＝ハン(1512～1920) [ホラズム＝ハン国]
コーカンド＝ハン(1709～1875) [シル川の上流域]

サファヴィー朝(1501～1736)

651年滅亡のササン朝ペルシア以来, 850年ぶりのイラン国家

[20] 派(12イマーム派) イスマーイール1世(1502～24)の建国。都タブリーズ

“ [21] ”の称号使用。ユーフラテス川からアフガニスタンに至る領土。

[西＝オスマン帝国・東＝ムガル帝国・北＝ウズベク国と対峙する環境に注意!]

5代, アッバース1世(1587～1629) 最盛期を現出。

オスマン帝国から領土の一部を奪取・ポルトガル人を [22] 島より追放

新都 [23] [「世界の半分」と呼ばれる。] ※イマームのモスク建設

∴ヨーロッパ諸国との交流 [蘭, 英, 仏] を保ち, オスマンと対抗。[バルカンからの絹とオスマンへの共同戦線]

1722 年～1728 年, アフガン族の侵入により事実上崩壊に至る。

※《アフシャー朝 (1736～1796)》ナディール=シャー (1736～1747) トルコ系

サファヴィー朝を滅ぼして, アフガニスタン・北インドまで拡大。ムガル帝国に侵入。

[1739 年, 一時デリー占領。]

ドゥラッニ朝 (1747～1818) [アフマト=シャー (ナディール=シャーの武将) 首都カンダハール (後カブールに遷都。)]

ゼンド (サント) 朝 (1750～1794) ← ∴ カージャール朝 (1796～1925) で再度統一!

オスマン帝国

○オスマン (1 世) = ベイ (1299～1326) が小アジア西北部に建国。← 11 世紀までルーム=セルジュークに隷属。

○2 代オルハン (1326～62) 首都ブルサ

○3 代, ムラト 1 世 (1360～89) ビザンツ帝国領へ進出。

[1365 年 [24] (エディルネ) 占領 [1366 年に遷都 (1453 年までの都)]]

[1389 年, コソヴォの戦いでセルビア軍を破る。]

○4 代, [25] 世 (1389～1402)

1396 年, ニコポリスの戦いでドナウ川流域に進出 (ブルガリア全域支配)

[ハンガリー王ジギスムントの指揮によるトルコ十字軍 (英・独・仏・バルカン連合軍) を撃退。]

1402 年, [26] (アンゴラ) の戦いでティムールに破れ, 捕虜となる

[帝国, 一時的に瓦解寸前になる。]

○7 代, [27] 世 (1444～46 / 1451～81) = イスラーム世界の覇者として復興。

1453 年, コンスタンティノープルを陥落。= ビザンツ帝国滅亡。

[遷都し, [28] と改称。]

○9 代, セリム 1 世 (1512～20) 1517 年, [29] 朝滅亡。

∴ メッカ, メディナ (ヒジャーズ) の保護権獲得。 [スルタン=カリフ制の由来]

※主張するのは 18 世紀末以降

オスマン帝国の制度と社会

スルタン…強大な専制君主 → イスラーム法にもとづく政治 ウラマー中心の法行政

行政機構整備…州・県・郡

[30] …帝国内のキリスト教徒・ユダヤ教徒の共同体

(自治を認め, イスラーム教徒との共存はかる)

軍隊 騎士軍団… [31] (土地からの徴税権) を保持

制

(バルカン半島征服などスルタンの常備軍として各地の征服に活躍)

[33] 世 (1520~1566) 宰相ソクルル=メフメト=パシャ [最盛期を現出。]

サファヴィー朝から南イラク奪取, 北アフリカに支配拡大

1526 年, モハーチの戦い。[[34] を支配。]

1529 年, 第一次 [35] 包囲でオーストリアに圧力。

{ ∴ フランソワ 1 世との共謀。→[打倒, カール 5 世]※イタリア戦争 (1521~1544)との関係。}

∴ カール 5 世のルター派に対する妥協

1526 年, 第一回シュパイエル国会で容認。

1529 年, 第二回シュパイエル国会で再度禁止。

フランス (フランソワ 1 世) と同盟…神聖ローマ帝国に対抗

フランス商人の居住・通商の自由承認=

[36]

※慣習を1569年にセリム2世がフランスに公認したものが最初とされる (～1923年ローザンヌ条約)

1538 年, プレヴェザの海戦[スペイン, ヴェネツィア, ローマ教皇連合軍]で東地中海制海権獲得。

○セリム2世 (1566~1574) 泥酔王 [1571年, [37] の海戦での敗北。

オスマン艦隊制海権維持→ [38] 世紀末まで, ヨーロッパ諸国との力関係に変化なし

○ムラト 3 世 (1574~1595) 無能王 ∴ソクル=メフメト=パシャの補佐で辛うじて権威を存続。

[領土は拡大=1577 年, イエメン併合。]

※15 世紀後半=大航海時代到来による交易ルートの変化。 [地中海→大西洋・インド洋]

16 世紀, イギリス・フランス・オランダの重商主義 [トルコは原料品の売り手となる。]

〔空欄解答（ティムール朝・ムガル帝国・サファヴィー朝・オスマン帝国）〕

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,
9,	10,	11,	12,
13,	14,	15,	16,
17,	18,	19,	20,
21,	22,	23,	24,
25,	26,	27,	28,
29,	30,	31,	32,
33,	33,	34,	35,
36,	37,	38,	

東南アジア史概観

『ベトナム北部方面』 ∴ 中国の支配地域（前 3 世紀末～後 10 世紀）

※ドンソン文化（前 4.3 世紀～1 世紀）{ベトナム北部=青銅器・鉄器の使用，銅鼓・稲作}

秦（始皇帝）＝前 214 年，3 郡の建設。〔南海・桂林・象〕

←〔 1 〕国（前 203～前 111）{秦朝滅亡後に趙佗が建国}

漢（〔 2 〕）＝南越国を征服し，9 郡設置。〔交趾（ハノイ）・九真・日南など〕

後漢＝40～43 年，徴姉妹の反乱（光武帝期に鎮圧 ベトナムのジャンヌ＝ダルク）

唐（高宗）＝〔 3 〕都護府の設置

《大越国（1054 正式に国号とする）》

李朝（1010～1225）〔李公蘊が建国し，唐にならい中央集権化。都ハノイ〕

※〔 4 〕（1225～1400）3 度にわたりモンゴル軍を撃退。

〔1257 年フビライ＝ハン時代以降の二度＝1285 年，1287 年〕字喃（〔 5 〕）を創始

（後）黎朝（1428～1527）（1532・33～1789）黎利

明（〔 6 〕時代）の侵攻後建国。チャンパー（占城）を征服し，ベトナム支配

ユエの阮氏とハノイの鄭氏の対立，西山党の乱が勃発。 ※西山朝（1778～1802）

《〔 7 〕国》阮朝（1802～1945）阮福映が仏人（ピニョー）の協力で建国。都，ユエ（順化）

19 世紀後半，サイゴン・ユエ条約で植民地化

『チャンパー・カンボジア方面』

チャンパー＝192年頃、黄巾の乱の混乱に際し、中国から自立。インドシナ系チャム族。

∴2世紀末、成立の林邑、9世紀後半の〔 8 〕は有名。※占城稻（宋に輸出。）

《扶南》（100年頃～640年頃）〔オケオの遺跡。（金貨・中国銅鏡）〕

《真臘》（6世紀半ば～15世紀）〔 9 〕人の建国。

8世紀には陸真臘（北）と水真臘（南）に分裂し、南部はシャイレンドラ朝に服属。

※アンコール（クメール）朝（802～1432）

9世紀初頭、ジャヤヴァルマン2世（シュリーヴィジャヤから来朝。）による再建。

スールヤヴァルマン2世（位1113～1152頃）〔〔 10 〕造営（ヒンドゥー教→仏教寺院）〕

ジャヤヴァルマン7世（位1181～1218頃）アンコール＝トムの増築〔建築開始は9世紀末〕

←タイ族の圧力〔13世紀、スコータイ朝が南部へ進出。1431年、アユタヤ朝により滅亡。〕

『タイ（シャム）方面』メナム川（チャオプラヤ川）下流域

ドヴァーラヴァティー朝（7～8世紀頃）〔モン人（ビルマ、タイ海岸地域）〕上座部仏教受容

元による〔 11 〕国（937～1254）の滅亡。→多数のタイ族が南下。

《スコータイ朝》（1257～1438）真臘の衰退に乘じ、タイ族初の王朝自立。

3代、〔 12 〕王（1275頃～1317頃）のとき最盛期 元との交流。

1283年、タイ文字創始。〔クメール文字に由来。〕

《アユタヤ朝》（1350・51～1767）ラーマティボーディー1世の建国。明にも使節派遣。

∴日本人の移住も多く各地に日本人町出現。〔山田長政の活躍。朱印船貿易＝江戸幕府〕

∴シュリーヴィジャヤにかわる、海上貿易の繁栄を享受。

←16世紀以来ビルマ（トングー朝）との抗争が続き、18世紀にコンバウン朝により滅亡。

《ラタナコーシン（チャクリ）朝》（1782～） 都、バンコク（クルンテープ）

4代、ラーマ4世（1851～68）〔英と東側からの仏の進出に対処しつつ西欧化政策を展開。〕

5代、〔 13 〕世（1868～1910）〔チュラロンコーン（タイ近代化の父）〕

「東南アジア唯一の独立を維持できた国となる。＜英・仏の緩衝地帯＞」

※ラン＝サン王国（14～18世紀）〔タイ族の一派ラオ族〕

『ビルマ方面』イラワディ川流域

《パガン（蒲甘）朝》（1044～1287）都パガン ビルマ族が南下。上座部仏教の隆盛。

モン族の影響を得てビルマの世界を構築。[パーリ語・モン文字→ビルマ文字]

1253年、大理滅亡後、1277年・1283年とフビライ＝ハンの攻撃で滅亡。

《トウングー朝》(1531～1752) 都ベグーからアヴァへ遷都

《[14] (アラウンパヤー) 朝》(1752～1885)

都ラングーン(現ヤンゴン)

1767年、アユタヤ朝を滅亡。清朝乾隆帝の軍を撃退。イギリスは和親通商条約の締結後、ビルマ戦争(1826年・1852年・1885年)で勝利しインド帝国の1州として併合(1886年)

『マライ半島・インドネシア方面』

《シュリーヴィジャヤ王国》(7世紀後半～14世紀) 都、[15]

7世紀半ば、扶南が滅亡し、新海上王国として繁栄。 ∴ 大乘仏教が隆盛。

[[16] の来朝、パレンバン滞在中、「南海寄帰内法伝」を記述。]

8世紀半ば、シャイレンドラ朝が進出するが、結婚政策で王家を抑えて最盛期を現出。

シャイレンドラ朝(8世紀～9世紀前半) ジャワ島中部に成立

[8世紀末真臘国を服属。]

∴ 大乘仏教の繁栄。[[17] の仏塔(780年～833年頃)]

※ <古マタラム(クディリ)朝> (10世紀～1222) 中部ジャワにシャイレンドラ王家の移動に際し、成立。

↑ [18] 教国(シヴァ派) 10世紀、ジャワ東部のクディリに移動。

<シンガサリ朝> (1222～1292) クルタナガラ王の時スマトラ、バリ島征服←元の遠征で衰退。

↑
《マジャパヒト王国》(1293～1520) シンガサリ王族ラ・デナンヒジャヤ[元の遠征に協力]建国。

ジャワ最後のヒンドゥー教国(シヴァ神) ∴ そこでバリ島に注目!

ジャワ島のワヤン(影絵人形芝居)

15世紀鄭和の遠征後、明に朝貢 ∴ 13世紀以降イスラーム教勢力が拡大[東部海岸など]

※ [19] 王国(15世紀初頭: 1402頃～1511) [東南アジア最初のイスラーム国家。]

マジャパヒト王国に代わり、香料貿易中心となるが、[20] 進出で滅亡

[1511年インド総督アルブケルケ]

[21] 王国(16世紀末～1755) = ジャワ中南部

バンテン王国(1527～1813)＝ジャワ西部

アチェ王国(16世紀初期～1912)＝スマトラ島北部

16世紀末オランダのインドネシア植民地化進行[ハウトマンの商船がジャワ西部に到着。]

1602年、東インド会社→1619年バタヴィアを拠点として香料貿易とキリスト教布教。

[空欄解答(東南アジア史)]

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,
9,	10,	11,	12,
13,	14,	15,	16,
17,	18,	19,	20,
21,			

アフリカ史(帝国主義以前)

<西アフリカの黒人国家(ニジェール・セネガル川流域)>

ガーナ王国(7世紀頃～1150)マンディンゴ人建国。首都、クンビ＝サレー

サハラ縦断貿易で繁栄([1])と塩の交換 11世紀以降、イスラーム化。

1079, 77年ムラービト朝の攻撃で衰退

マリ王国(1240～1473)都ニアニ 黄金の都, [2]の繁栄

[3] (カンカン＝ムーサ)の時全盛。

[メッカ巡礼(1324～1325)は有名。(カイロで金大暴落)]∴この地にイブン＝バットゥータも訪問(1352年)

[4]王国(1473～1591)都ガオ [最大領土のイスラーム国家]

モロッコ遠征軍(サード朝・マンスール王)の銃により滅亡。

<ナイル上流の黒人国家>

クシュ王国(前920頃～後350)

クシュ人がヌビアに建国 前8世紀に一時エジプト支配(第25王朝)

前7世紀, [5]のエジプト侵入で勢力後退 第26王朝の攻撃でメロエに遷都

メロエ遷都(時代)(前670頃～後350頃)エジプトから伝わる鉄器文明を形成

前7世紀後半ナパタから[6]に遷都

←[7]王国{エチオピア王国(4世紀にキリスト教化が進行)}に滅ぼされる。

[8]系アクスム人{単性論=[9]派キリスト教の伝播}

<アフリカ東岸の都市国家>

※モガディシュ以北＝東岸 古くからアラビア半とイランとの海上貿易

※ モノモタバ王国（11～19世紀） ザンベジ川流域に15世紀頃繁栄。（金の貿易）

[10] の石像遺跡

インド洋貿易の繁栄地（スワヒリ語などイスラーム文化の多大な影響）

ザンジバル キルワ モンバサ モガディシュ ダウ船のインド洋貿易{ [11] 語 }

[12] （鄭和の支隊・ヴァスコ＝ダ＝ガマの寄港した都市）

[空欄解答（古代アフリカ史）]

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,
9,	10,	11,	12,

近代の東アジア

近代の中国（清末事情）

7代嘉慶帝（1796～1820）白蓮教徒（1796～1804），天理教徒の乱（1813）

イギリスからの外交圧力。清朝は制限撤廃の要求を拒否。 ∴ 8代，道光帝（1820～1850）

[[1]] （1792年）・アムステルダム（1816年）・ネーピア（1834年）

{ 1760年代，産業革命を経て資本主義が成熟し，19世紀初頭には自由貿易体制を確立しようとしている，イギリスの政治状態についてまとめること。 ※北米植民地を失い，銀の支払いに苦慮

<アヘン戦争までの過程。> イギリス東インド会社 [18世紀後半，中国貿易を独占。]

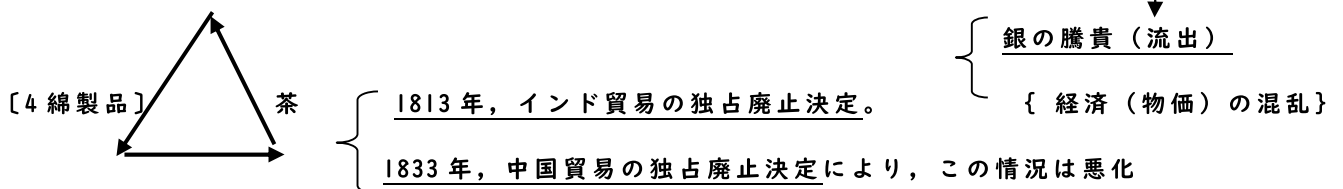
片貿易の形態。 [イギリス] = 銀 → [2] ・絹・陶磁器 = [中国]

∴ 産業革命後，飲茶の習慣が普及。[1784年以来急増。] { 貿易港広州一港に限定。}

<三角貿易へと転換> インド産の [3] を密輸出することにより，片貿易を打開し，中国銀を

回収する。1820年代（正確には1827年）には，中国からの銀流出に転じる。

[イギリス] 19世紀初頭の自由貿易主義の確立。[東インド会社の特許限定]



[インド] アヘン [中国] [アヘン流入激増] ∴ ジャーディン＝マセソン商会（ウィリアム＝ジャーディン）活躍。

<アヘン戦争の勃発。> （1840～1842） ※ 8代道光帝（1820～50）

1839年，害毒と銀流出による財政の破綻からアヘンの輸入制限をした [4] （欽差大臣）

の措置からイギリス海軍の広東攻撃始まる

∴ 1841年広東郊外農民による平英団（三元里事件）抵抗。

[パーマストン内閣(自由党)← [5] [「随筆イギリス」で批判。]

南京条約 (1842 年) { ○ 5 港の開港。 (広東・厦門・福州・寧波・ [6])
○ [7] の割譲。 [林則徐はイリ地方に左遷。]

○ 公行の独占廃止。 ∴ 賠償金の支払い (2100 万両) ・ 対等国交の原則。

1843 年 7 月, 五港通商章程[治外法権 ([8]) 容認]

1843 年 10 月, 虎門寨追加条約 (虎門条約)

[片務的 [9] 待遇・関税自主権喪失 (関税協定) = 輸出入税率]

1844 年 6 月, アメリカ (望厦条約) 9 月, フランス (黄埔条約)

1845 年, イギリスが上海に [10] を設置 ※魏源『海国図志』1842 年刊行

<アロー戦争(1856~1860)[第 2 次アヘン戦争]> ∴ 9 代, 咸豊帝 (文宗; 1850~1861)

背景 (口実) イギリス = 清官憲のアロー号臨検に際し, 中国人乗員不当逮捕。

フランス = 広西省での宣教師 (シャド・トレヌ) 殺害事件。 { クリミア戦争で協力 }

[[11] 世 (1852~1870)]

《ロシアの南下外交との関連に注意》

∴ 1792 年 ラクスマン (根室) 1804 年, レザノフ (長崎) 通商失敗。

1858 年, 広州占領。 { 東シベリア総督ムラヴィヨフの画策。 }

1858 年, [12] 条約 1858 年, [13] 条約

{ 10 港開港・公使北京駐在・キリスト教の布教公認 } [黒龍江 (アムール川) 以北の領有。]
∴ 内地旅行の自由と貿易の承認・河川航行の自由 ∴ ウスリー江以東の共同管理。

批准交換の英仏使節団が攻撃され, 戦争再開。天津, 北京 [[14] 焼失] の占領で終焉。

1860 年, [15] 条約 ロシアの調停 = 1860 年, (露清) 北京条約

天津条約の批准 { 天津を加え, 11 港開港。 [ウスリー江以東 = 沿海州獲得。]
イギリスに [16] 半島南部割譲。賠償金増額

1861 年, 総理 (各国事務) 衙門 [北京, 初の外務官庁] の設置。 1861 年, ウラジヴォストーク開港。

※ 同じ頃, アヘン貿易を公認 (太平洋進出の拠点確保)

太平天国の乱 (1851~1864)

政治の刷新断行・立憲君主政の樹立。（明治維新を規範。）

9月、保守派のクーデタ（戊戌の政変） [保守派＝西太后（軍部 [26])]

→[光緒帝幽閉，康有為亡命（日本で保皇会を結成）]

排外運動隆盛→仇教運動＝キリスト教排斥運動 [1860年北京条約でキリスト教布教公認] 中心。

[27] 事件 [北清事変] (1899・1900～1901) [山東省での武装蜂起。]

白蓮教系 「扶清滅洋」を唱えて各国大使館襲撃。清朝政府黙認。

列強8ヶ国共同出兵 [日本・ロシア・ 英・ [28] ・独・仏・奥・伊]

約18000 8000人 ←→ 4800人 {南ア戦争中} {アギナルド軍の抑圧。}

1901年， [29] (辛丑条約) [8ヶ国＋ベルギー・オランダ・スペイン＝11ヶ国が調印。]

[賠償金の支払い，外国軍隊の北京駐留など] “中国半植民地化決定。”

西太后政権下 光緒新政 {1905年 [30] 制の廃止・1908年憲法大綱}

『孫文の海外活動。』

※ [31] 年，革命 [辛亥革命]

1894年，興中会（ハワイ）

1905年， [32] 会（東京）

華興会（黄興・宋教仁）光復会（章炳麟・蔡元培）

∴鉄道国有化問題 [外資導入（米・英・仏・独）]

↓
借款を受ける担保とするため

{ [33] を提唱。

[民族独立・民権伸張・民生安定]

驅除韃虜・恢復中華・創立民国・平均地権

↓
四川暴動 [武昌蜂起] → 1912年，中華民国（南京）→ [34] 帰国。（臨時大總統）

∴革命政権の経済的，軍事的弱体さから袁世凱が登場。※3月臨時約法（主権在民，基本的人権尊重）

[35] 登場（北洋軍閥出身）{宣統帝（溥儀）退位→袁臨時大總統就任}

袁の反動政治 { 国民党解散（1913年3月宋教仁暗殺）←第二革命 ———— ↓孫文再度亡命。

北京拠点 { 独裁体制 [世襲總統] 10月，正式大總統（新約法） 1914年 [36] 党結成。（東京）

1915年5月7日，対華二十一カ条の要求受諾（国恥記念日）

1915年12月，帝政復活→第三革命 1916年3月帝政取り消し表明 1916年，袁死亡。

軍閥政権 段祺瑞（親日派＝安徽派）対独宣戦布告 {※西原借款（寺内内閣）}

∴他の軍閥＝奉天派 [張作霖（満州）] ・直隸派 [馮国璋，吳佩孚（北京）]

近代の朝鮮（日本の侵略）

党争による政治的動揺→1811～12年、洪景来（没落した両班出身）の乱（平安道農民戦争）勃発

19世紀、列強来航。〔〔37〕〕は鎖国政策で要求拒否。〕

※1825～42年、異国船打払令 1842年（天保）の薪水給与令

1853年ペリー浦賀に来航 1858年日米修好通商条約 安政五カ国条約（米・蘭・露・英・仏）

1855年日露和親条約（千島ではエトロフ以南日本・ウルップ以北ロシアを国境）

1868年、〔38〕〔アヘン戦争など列強と中国の関係を教訓。〕

幕末から一貫して朝鮮進出を主張。{∴征韓論（西郷隆盛・板垣退助）←大久保利通・岩倉具視等}

1875年、〔39〕事件。〔雲揚号攻撃を口実。〕

1876年日朝修好条規（江華条約）〔3港開港（後に釜山・仁川・元山に決定）領事裁判権〕

∴清朝からの従属離脱。

※1872年琉球藩（←日、清に両属）1874年台湾出兵 1879年沖縄県（琉球処分）

1882年、〔40〕〔∴26代、李太王（高宗，1863～1907）王妃＝閔妃・生父＝大院君〕

閔氏一派（親日政策採用）の内政改革に対する大院君（1873年一旦引退）一派反日クテタ

∴閔氏政権復帰後、清朝へ接近。＝〔41〕党成立。

1884年、〔42〕独立党〔（親日派）金玉均・朴泳孝〕の巻き返しの蜂起。

{ 清〔清仏戦争の最中であり、清がベトナムの宗主権を喪失。6月天津条約〕の干渉で失敗。

1885年4月、〔43〕条約で両国軍の撤兵、派兵時の事前通告

{政治的影響力は後退、しかし経済的支配は進行。（日本の綿製品の市場介入。）}

1894年、〔44〕党の乱。〔甲午農民運動（全執準が指導）〕

∴西学＝カトリックに対する東学（1860年、崔濟愚創始。）の動向。

清軍に介入を要請。←欧米、日本の侵略。

1894年、日英通商航海条約＝最初の対等条約（陸奥条約＝陸奥宗光外相）

1896年、日清通商航海条約

日清戦争勝利〔下関条約〕
┌ 遼東半島・台湾・朝鮮独立＝日本の優越権確立・澎湖諸島の割譲
└ 賠償金の支払い・通商上の特権付与・開港場での企業の設立

↑

〔45〕〔露・仏・独〕∴1895年、閔氏親露政権〔乙未事件＝閔妃殺害（日本公使三浦梧楼）。〕

1897年に独立国の形式を整えるため大韓帝国と改称。

1904 年 2 月, 日露戦争勃発 [第一次大戦に先行する小型世界戦争?]

∴ 同年 4 月 8 日, 英仏協商 [ヨーロッパでの戦争回避]

日本支持 (英, 米) ←→ 露 ([46] 世) 支持 { 仏, 独 (ヴィルヘルム 2 世) }

1905 年 1 月旅順陥落, 3 月奉天(現瀋陽)会戦

1905 年日本海海戦でバルチック艦隊全滅。 「1 月, 血の日曜日事件勃発。(第一革命)」

1905 年 9 月, [47] 条約 [セオドア＝ローズヴェルトの調停。]

{ 全権 (日 = 小村寿太郎・露 = ヴィッテ) }

○ 韓国の指導・監督権 (ロシアは日本の朝鮮における優越権を認可)]

○ 朝鮮に対する優越権

○ 遼東半島南部 (旅順・大連) の租借権。 [1906 年, [48] 鉄道の利権]

○ 樺太 (サハリン) の北緯 50 度以南を獲得 賠償金なし → 日比谷焼打ち事件

1904 年 8 月第 1 次日韓協約 {日本の政治顧問が派遣}

1905 年 11 月第 2 次日韓協定 (日韓保護条約) で韓国は日本の保護国となり, [49] が

事実上の政権掌握。 {外交権獲得 = 韓国統監府設置 初代統監, 伊藤博文}

1907 年 6 月 [50] 密使事件 {李太王(高宗)退位 → 純宗}

1907 年, 第 3 次と続き日本の干渉権を強化。 {韓国軍解散} 反日 [51] 運動が高揚

※1907 年 6 月, 日露協約, 日仏協約の締結 ※1907 年 8 月英露協商

1909 年, 初代韓国統監 伊藤博文 (ハルビンで射殺 安重根)

[52] 年, 韓国併合 朝鮮 [53] の設置

軍事・行政の全てを統監する朝鮮統治機関

[54] の実施

※1910~18 年土地調査事業 {所有権の明確でない土地没収}

〔空欄解答（近代の東アジア・朝鮮半島）〕

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,
9,	10,	11,	12,
13,	14,	15,	16,
17,	18,	19,	20,
21,	22,	23,	24,
25,	26,	27,	28,
29,	30,	31,	32,
33,	34,	35,	36,
37,	38,	39,	40,
41,	42,	43,	44,
45,	46,	47,	48,
49,	50,	51,	52,
53,	54,		

近代の西アジア

オスマン帝国と東方問題

1683 年, 第 2 次ウィーン包囲失敗。オスマン帝国の衰退はここから始まる

※レバントの海戦で敗北するが, 衰退 (領土縮小) はしない。

◆1699 年 [1] 条約 (ベオグラード北西)

※奥・ヴェネツィア・波 (ホーランド) ・露

[奥のハプスブルク家にハンガリー (大部分) とトランシルヴァニアを割譲。]

◆1774 年, [2] 条約

※露 エカテリナ 2 世の南下政策。(対トルコ政策)

[露に 黒海北岸割譲 (黒海制海権) ・ [3] = ハンのカリフ保護権を放棄。

[∴1783 年, ロシアが併合。]

【16 世紀初頭, 友好国であったフランスとの外交断絶。】

◆ナポレオンのエジプト遠征 (1798~1801) ∴第二次, 対仏大同盟に参加。[英・露・土]

[∴エジプトに [4] 朝が成立。(1805~1952)

元オスマン傭兵隊長のムハンマド=アリー [1805 年, エジプト大守] が創始。

◆ギリシア独立戦争 (1821~1829)

西欧ロマン主義の風潮 [5] [1823 年に参加し, 1824 年に戦病死。]

ドラクロワ「キオス島 (イオ) の虐殺」「民衆を率いる自由の女神」

1827 年, ナヴァリノの海戦で敗北。 [英・仏・露] × [土・エジプト (1824 年, 参加)]

1829 年, [6] (エディルネ) 条約 [露と土の間でギリシアの独立承認。]

1830 年, [7] 会議 [列国の独立承認]

→ [国境線の修正 (北方移動) 後, 1833 年正式に成立。]

※マフムト 2 世 (1808~1839) 1826 年, イェニチェリ全廃。

[ヨーロッパ式軍隊 (ニザーム=シャディット) 創設。]

◆東方問題 {ギリシア遠征の代償を求めるエジプトとヨーロッパ列国のトルコ領進出。}

第一次エジプト事件 (1831~1833) [1831 年, ムハンマド=アリーがシリアへ進軍。]

エジプト

英

×

土 = マフムト 2 世

露 = [8]

世 (1825~1855)

仏 [1830 年, シャルル 10 世の [9] に進出。]

※不凍港の獲得

1833 年, [10] 条約 [露にボスフォラス・ダーダネルス両海峡通行権認可。]

第二次エジプト事件 (1839~1841) [アリー, 統治権の世襲を要求。]

エジプト × 土 (アブデュル = メジト 1 世) ∴ 1838 年土・英通商条約 (ヨーロッパ工業製品の流入)
仏 × 英 [(エジプトと仏) ・ (土と露) の両者の関係を警戒。]
露 ∴ オーストリアとプロイセンもトルコを援助。

1840 年, ロンドン条約 [トルコの宗主権下, アリーの統治世襲権公認するがシリアは返還するを決議。]

1841 年, 国際海峡協定 (ダーダネルス海峡協定) { 英・露・普・奥・仏・土 }

[∴ ボスフォラス・ダーダネルス両海峡の [11] を維持。]

アブデュル = メジト 1 世 (1839~1861) ◇ ④ 1839 年 11 月, ギュルハネ勅令

○ ムスリムと非ムスリムの法的平等 [[12] (恩恵改革) の開始]

列強が有利に利用 [非ムスリムの身分的, 政治的地位拡大。 1849 年, ブルガリア人の反乱など。]

ロシアの政治的介入。 (南下政策) ←→ イギリスのトルコ保全策。
フランスとの聖地管理権問題 [∴ 1852 年, 仏の特権をトルコが譲歩]

ニコライ 1 世; [13] の保護者 ←→ ナポレオン 3 世; カトリックの保護者

◆ [14] 戦争 (1853~1856) 1853 年, 開戦 [モルダヴィア・ワラキア占領]

翌年, 英・仏の参戦。 [モルダヴィア・ワラキア撤退要求無視。 8 月, 奥の参戦を恐れ撤退。]

[15] 要塞の攻防戦。 [黒海北岸のクリミア半島]

ナティンゲール活躍 [敵味方の区別なく看護] → 1864 年アンリ = デュナン [国際赤十字の創設。]

1855 年, [16] 参戦。 [仏の好意を得るため。]

1856 年, [17] 条約でロシアの南下を阻止。

∴ アレクサンドル 2 世の大改革 [1861 年, 農奴解放令の実施。]

{ 黒海の中立化・ドナウ川の自由航行・ボスフォラス, ダーダネルス両海峡中立の再確認。 }

∴ モルダヴィア・ワラキア公国 [トルコ宗主権下の自治を承認。]

※ スエズ運河建設事業 (1858 年開始 ~ 69 年開通) { 戦争の対外借入などで 1875 年, 国家財政破綻 } }

< ヨーロッパ資本の進出によるオスマン帝国の半植民地化。 >

◇ 1876 年, [18] 憲法 (ミドハト = パシャ) 初の憲法 [二院制・責任内閣制] 新オスマン人

∴ この失敗により, タンジマート = ハイリエ (恩恵的改革) の終了。

※ 植民地化促進, ウラマーの弱体化 → スルタンの専制

スラヴ民族主義を刺激。 1875 年, ボスニア・ヘルツェゴヴィナの反乱。



1876 年, ブルガリアの四月蜂起。 1877 年, セルビア人の反乱。 < ミドハト = パシャ >

◆露土戦争（1877～1878） アレクサンドル 2 世の宣戦に対し、トルコ完敗

[19] 世（1876～1909） [議会解散。秘密警察制＝専制体制強化。]

1878 年 3 月， [20] （イェシルキョイ） 条約により念願の南下政策成就。

○ セルビア・モンテネグロ・ルーマニアの独立。

○ [21] 自治公国 [事実上ロシアの保護国化。]

イギリス・オーストリアの反対表明。 [フランスはドイツにより国際的孤立状態。]

1878 年 6～7 月， [22] 会議 [ビスマルクの調停]

○ セルビア・モンテネグロ・ルーマニア独立承認

○ ブルガリアの領土縮小 [トルコ宗主権確認。]

○ [23] の行政権（管理権） [オーストリアのみに確認。]

○ [24] 島をイギリスへ，そしてベッサラビアをロシアへ割譲。

スエズ運河との関連に注意。 [1875 年，スエズ株式の買収。（ディズレーリ第 2 次内閣。）]

∴トルコ（「瀕死の病人」）はバルカン領土の大部分を喪失。

ロシアは三帝同盟（1873 年）の不信感募る。

◇ 1908 年 7 月，サロニカ革命（現ギリシアのテッサロニケ）＝青年トルコ革命 ※1905 年日露戦争の日本勝利

「 [25] と進歩委員会」→アブデュル＝ハミト 2 世の専制政治。

{ ミドハト憲法復活・議会開催を目指すが，革命政権の未熟さから権力闘争に終始する。 }

[26] ＝パシャ中心に展開 [軍事独裁（1913～1918）] ∴辛亥革命と類似性

※1908 年 10 月， [27] 独立宣言。

オーストリアのボスニア，ヘルツェゴヴィナ併合

ブウラウ会議 [併合の代償として露のボスフォラス・ダーダネルス両海峡の通行権支持。]

∴大 [28] 主義が高揚し，汎スラブ主義の中核となる。

◆伊土戦争（1911～1912）でトリポリ，キレナイカ（現リビア）を喪失。 [英仏との関係]

◆1912年，第一次バルカン戦争

[[29] 同盟 = セルビア・モンテネグロ・ギリシア・ブルガリア]

∴ ロシアが盟主＝バルカン諸民族は相互の利害を自ら調整できないことに注意。

1913年5月，ロンドン条約[マケドニア・トラキアを割譲。（イスタンブルを除く欧領喪失）]

1913年6月，第二次バルカン戦争

[領土問題でブルガリア孤立。] でトルコも同盟側に参戦。

∴ 1912年11月，[30] の独立宣言 [1913年5月，イギリスの調停で承認。]

その後，トルコ・ブルガリアは独逸側に接近していく。

独はブルガリア接近により諦めかけていた（バルカン半島の位置に注意）3B政策への期待高揚！

[空欄解答（近代の西アジア）]

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,
9,	10,	11,	12,
13,	14,	15,	16,
17,	18,	19,	20,
21,	22,	23,	24,
25,	26,	27,	28,
29,	30,		

近代の西アジア・中央アジア



イラン

〔 1 〕 朝（トルコ系）

（1796～1925）に対する英、露の侵略。

〔 2 〕 派バーブ教徒の乱（1848～50）

19 世紀後半、タバコ＝ボイコット運動

{アフガーニー（イラン出身）の呼びかけ}

∴イラン立憲革命（1905～1911）

〔英・露の干渉と国民の支持がなく挫折〕

→1907 年，〔 3 〕

イラン北部＝露 イラン南東部とアフガニスタン＝英

※ロシア領トルキスタン〔ボハラ、ヒヴァ、コーカンド併合。（ウズベク 3 ハン国）〕

東トルキスタンのイスラーム教徒の反乱（1862～1871）でイリ地方に進出。

〔1881 年，イリ条約で清朝に返還。※左宗棠（欽差大臣）〕

※アフガン戦争〔第〔 4 〕次で 1881 年，外交により英の事実上の保護国化。1905 年正式に決定。〕

※アフガン人（パシュトゥーン人）

近代の南アジア（インド）

○イギリスのインド支配 カーナティック戦争（1744～48・1749～54・1756～63）

〔 5 〕 の戦い（1757）で仏・ベンガル土侯連合軍を撃退。※クライヴ（イギリス東インド会社）

1764 年ブクサールの戦い {翌年，ベンガル・ビハール・オリッサのディーワーニー（徴税権）獲得}

18 世紀後半，マイソール戦争（4 次）〔南インドを獲得。〕

18 世紀後半～19 世紀初頭，マラーター戦争（3 次）〔中部インドを獲得。〕

19 世紀中頃，〔 6 〕 戦争（2 次）〔パンジャブ地方を支配。〕

ザミンダーリー制（ベンガル管区・北インド）

ライヤットワーリー制（マドラス・ボンベイ領地方で導入）

〔 7 〕 の反乱（1857～1859）〔1858 年に〔 8 〕 帝国滅亡。〕

インド大反乱（インド独立戦争） ※ラクシュミー＝バーイ（北インド小国の王妃）戦死

※藩王国（インドの 3 分の 1）とイギリス政府と個別に条約を結び，小規模な内政権を獲得。

イギリスはマハラジャの封建的・反動的性格を民族運動の抑圧に利用。

1877 年，インド帝国成立。〔その後，英本国で学んだ知識人の手により民族運動展開する。〕

1885 年，インド〔 9 〕 派（バネルギー）結成。ボンベイで開催 〔英人ヒューム提唱（親英的性格）〕

∴ 1905 年, [10] 分割令。

[カーゾン総督 (1899~1905) = 民族分断政策と徴税強化。1911 年 12 月撤回]

{ 西部, ヒンドゥー地区 [現, インド共和国の西ベンガル州]
東部, イスラーム地区 [現, [11] (1971 年, 独立。)] に分割。

1906 年, [12] 大会 [急進派 [13] 等の活躍 (司会タゴール)]

「[14] (自治)・スワデーシ (国産品愛用)・英貨排斥・民族的教育」

※ラーム=モーハン=ローイ (バラモン出身=カースト批判, 女性地位改善=サティー寡婦殉死)

全インド=ムスリム (回教徒) 連盟の結成。[アガ=ハーン]

近代の東南アジア

○フランス領 [15] 連邦の成立過程。[越南国, 阮朝]

仏越戦争 (1858~1862) [[16] 条約でコーチシナ東部を獲得] ※1867 年劉永福, 黒旗軍

→ [17] 保護国化 (1863 年)

[18] 条約 {1883 年アルマン (仏全権大使) 条約・1884 年=保護国化の内容確認}

→ 清仏戦争 (1884~1885)でベトナム宗主権を獲得し, 1887 年, インドシナ連邦成立。

→ [19] は 1893 年に仏の保護領となり, 1899 年に連邦に編入。

ファン=ボーイ=チャウ 1904 年維新会

ドンズー (東遊) 運動←1907 年日仏協約



ボーリング条約 {タイ (ラーマ 4 世 1851~68) と英の友好通商条約}

○インドネシアのオランダ支配 香辛料の確保→16世紀、ジャワ島に到達

[24] 事件 (1623) …イギリスへ優越確定→ジャワ諸勢力の抵抗

[25] 王国の滅亡 (18世紀半ば)

1799年蘭東インド会社解散。19世紀初め、英占領→ウィーン体制後蘭に返還。

1824年ロンドン条約 (マラッカ海峡を境とする英仏勢力圏)

→ジャワ島の直接支配パドリ戦争 (1821～27) ジャワ戦争 (1825～30)

[26] 制度 (米作地の五分の一＝コーヒー、砂糖きび等を耕作) が発展。

[1830年頃以降東インド総督 [27] がジャワ島で実施]

20世紀初頭アチェ王国滅亡 {アチェ戦争 (1873～1912) }

19世紀末 サミン運動 (中部ジャワ オランダ支配に納税拒否) ブディ＝ウトモ

サレカット＝イスラーム (イスラーム同盟) 1911年ジャワ中部に結成

○フィリピン 16世紀後半～スペイン支配 ※ ホセ＝リサル {1892年フィリピン民族同盟結成}

→カティプーナン (ボニファシオ←富裕層アギナルド 米西戦争では米軍と提携

1899年フィリピン (マロロス) 共和国)

1898年、米西戦争 (パリ条約) アメリカが買収 ※ [28] の民族運動展開

[空欄解答 (近代の西・中央・南・東南アジア)]

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,
9,	10,	11,	12,
13,	14,	15,	16,
17,	18,	19,	20,
21,	22,	23,	24,
25,	26,	27,	28,

アフリカ分割

18世紀以降の英を中心とする大西洋三角貿易が発展[黒人奴隷の数激増=ユトレヒト条約]

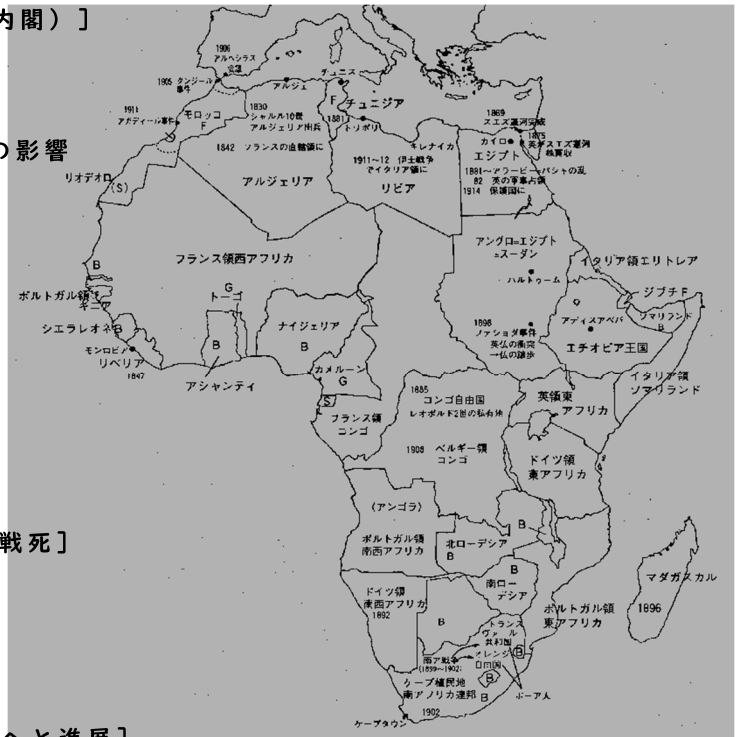
スペイン = 1883 年奴隷制廃止

ダオメ（ダホメー）王国（17c初～1894）←フランス

∴最初に占領した国が領有権を確立できるという原則（先占権）を確認 [15年で分割完了。]

【イギリスの場合】

[仏が外交的譲歩。→∴英仏協商（1904年）へと進展]



[10] (企業家, 1890年ケープ植民地首相))

1895年, ロードシア建設[ダイヤモンド・金の採掘]※イギリス支配から北方へ移動グレート＝トレック

[11] 戦争(1899～1902) [[12] = 17世紀以降のオランダ系移民。]

ジョセフ＝フェンハレン植民相→トランスヴァール共和国(1855～1902) オレンジ自由国(1854～1902) 侵略。

[金とダイヤモンドの鉱脈が発見。]

1910年, [13] 成立。[ケープ・オレンジ・トランスヴァール・ナタールの4州]

※5自治領の成立。 { カナダ連邦(1867年)・オーストラリア連邦(1901年)
ニュージランド連邦(1907年)・ニューファンドランド(1917年) }

【フランスの場合】 1830年, アルジェリア進出。{1842年に直轄領とする。}

[シャルル10世(ブルボン朝最後の王)の時, 国内の不満を海外におけるため。]

1881年, [14] 保護領。(伊の失望に注意!)

1890年代, 仏領西アフリカ[サハラ地域を領有。(マリ・ニジェール)]

1888年, [15] (仏領ソマリーランド)[紅海沿岸]・1896年, マダガスカル

{ 1912年, モロッコ事件による保護国化 ※アフリカ [16] 政策
[1905年, 第1次事件(タンジール)・1911年, 第2次事件(アガディール)]

※1898年ファショダ事件→1904年英仏協商

《その他のアフリカ占領地域》

□ドイツ=1880年代半ば, カメルーン・西南アフリカ・東アフリカなどを獲得

※1905～07マジマジ(水)の反乱

経済的価値が小さい・20世紀新たな植民地獲得をめざす→[17] 事件(1905, 1911)

□ベルギー=コンゴ自由国(1885～1908)→[18] (1908～1960)

[レオポルド2世の死の前年, 植民地として払い下げ。]

□イタリア=1885年, エリトリア・1889年, 伊領ソマリーランド[英, 仏に遅れながらも]

{ ∴ [19] 皇帝メネリク2世(アビシニア高原)攻撃(1895～1896)失敗。アドワの戦い
∴ 1912年, トリポリ・キレナイカ(現リビア)[伊土戦争(1911～1912)で獲得。]

◎19世紀末, エチオピア帝国・[20] 共和国(1822年アメリカ植民教会)・モロッコ(1部は西領)



だけが辛うじて独立を維持。

[1821年, 成立(解放奴隷の居住地)→1847年, 共和政。国名はリバティ(自由)に由来。

原料や資源の確保, 商品市場などの経済的利害, 戦略基地設置などの関心

人為的な境界線の策定→人間のつながりや交易網を破壊→住民の自立や独立に大きな障害

太平洋分割

○オーストラリア ※18世紀後半，英人クックが東海岸を英領と宣言

[18世紀末，英の流刑植民地→19世紀初め牧羊業創始（〔21〕を追放）]

- 19世紀半ば，ゴールドラッシュで多量の移民流入。
- 1901年，連邦として英の自治領となる。

○ニュージーランド（1907年）

[∴タスマンの発見。タスマニアも同様。]

1840年，原住民〔22〕族と
植民地契約]

○メラネシア地域（黒い島々）

- 〔23〕西部（1828年，蘭領）
- 北部（1884年，独領）
- 南部（1884年，英領）
- ビスマルク諸島（1884年，独領）
- ニューカレドニア（19世紀半ば，仏領） フィジー諸島（19世紀後半，英領）
- 〔24〕諸島〔北部（19世紀末，独領）・南部（19世紀末，英領）]

○ポリネシア地域（多数の島々）

- ハワイ[1810年，ハワイ王国により諸島を統一。共和国となり 1898年米領に併合。]
- トンガ王国（1900年，英領）・タヒチ（19世紀半ば，仏領）
- 〔25〕諸島〔東部（1899年，米領）・西部（1899年，独領）]

○ミクロネシア地域（小さな島々）

- マリアナ諸島〔〔26〕（1898年米西戦争で米領），その他（1899年独領）]
- マーシャル諸島（1886年独領）・カロリン諸島，パラオ諸島（1899年独が西から買収）

[空欄解答（アフリカ分割・太平洋の分割）]

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,
9,	10,	11,	12,
13,	14,	15,	16,
17,	18,	19,	20,
21,	22,	23,	24,
25,	26,		

第一次世界大戦後のアジア・アフリカ

西アジア・エジプト



セーヴル条約（1920, 8）への不満。 1919年、ムスタファ＝ケマルがアナトリア・ルメニア権利擁護団を組織。

1920年、トルコ大国民議会結集（アンカラ 人民党）。

[ギリシア＝トルコ戦争（1919～1922）で侵入軍をイズミル（スミルナ）港から撃退。]

∴ 1922年 [1] 制廃止。 [メフメト6世、マルタ島へ亡命。]

1923年、トルコ共和国成立。ケマル＝アタテュルク（パシャは1934年、廃止）]の業績。

[2] 条約締結。 [戦前の国境を確保・治外法権の撤廃・関税自主権の回復など]

[3] へ遷都。 共和人民党による一党独裁体制の継続

1924年、共和国憲法制定。 [4] 制廃止により政教分離。※カリフ擁護運動（インド・イラン）

1925年、太陽暦採用。（←イスラーム暦＝太陰暦）

1928年、文字改革。 [ローマ字の採用←アラビア文字]

1932年、国際連盟加盟 1934年、婦人参政権、姓名制実施 {アタテュルク（父なるトルコ人）}。

<エジプト> イギリスの保護国からの独立

1918年、 [5] (党)の結成 民族代表団（サアド＝ザグルール）

1922年、エジプト王国成立 ムスリム同胞団（1929年ハサン＝アルバンナ創設）。

1936年、イギリス＝エジプト同盟条約により完全独立承認（スエズ地域のイギリス軍駐屯は放棄せず）

<シリア・レバノン> 1920年、 [6] の委任統治領となる。

1941年独立宣言し、1943年に、レバノン共和国へ

1936年自治獲得し、1944年、シリア共和国が成立（1946年、独立）

<ヨルダン> 1920年、 [7] の委任統治領となる。

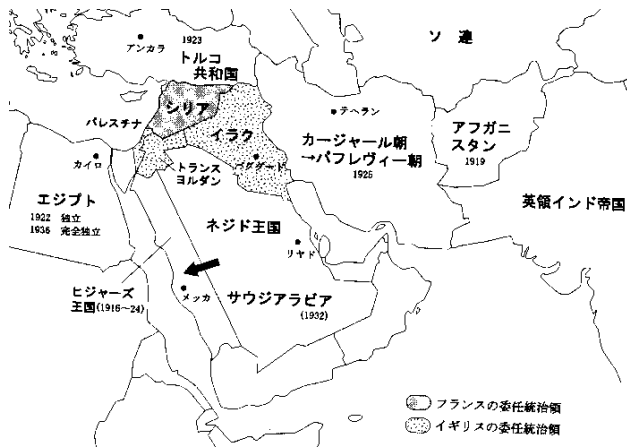
1923年トランスヨルダン首長国成立 初代国王アブドゥッラー（ファイサルの弟）

1946年、トランスヨルダン王国として完全独立、49年、ヨルダン＝ハーシム王国と改称}

<イラク> 1920年、 [7] の委任統治領となる。

1921年、イラク王国 {ハーシム家のファイサル（フセインの第3王子）を招く}の成立

1932年、完全独立



<サウジアラビア>

1915 年フサイン・マクマホン協定

1916 年 [8] 王国成立

ワッハーブ派の保護者 [9] 台頭

1924 年ヒジャーズ王国を併合

ヒジャーズ = ネジト王国

1932 年サウジアラビア王国を樹立

アラビア半島の大半を支配

1938 年, 石油資源発見

<イラン> 北部 (露) 南部 (英) の進出 → 半植民地化 (1907 年, 英露協商)

1921 年 [10] クーデタ 1925 年パフレヴィー朝創始 (カージャール朝滅亡)

1935 年, ペルシアからイランへと国号を改称 (石油利権はイギリスが保有)

1941 年英, ソ連の侵入でレザー退位 第二次世界大戦では連合国側に協力

<アフガニスタン> 1919 年, イギリスの保護国からの独立 (第 3 次アフガン戦争)

<パレスチナ> フセイン・マクマホン協定 (1915) …アラブ人の独立を約束

バルフォア宣言 (1917) …シオニズム運動を援助

矛盾する約束 → 戦後, イギリスの委任統治領 → アラブ・ユダヤの衝突

※ 1947 年, 国際連合 (パレスチナ分割決議)

南アジア

<インド>

日露戦争の勝利 ◇ イギリス支配下に近代文明が導入 = インテリ (知識人階級) の自覚。

大戦中に民族資本の成長。[プロレタリアートも発生。]

ロシア革命の成功。= 西欧権威の失墜と民族主義の高揚。



第一次世界大戦中にインド兵, 大量に戦死 → 国際世論の圧力 … 民族自決原則 → 自治の約束

1919 年, [11] 法 [自治の約束を無視し, 反英運動弾圧法規を公布。]

[令状なしの逮捕・裁判なしの投獄等が認可。]

1919 年, インド統治法。[統治体制を中央政府と州政府 (部分的責任制を認可。) に分割。]

[12] 指導の反英運動。 [13] 事件で急速に激化。

非暴力、不服従（非協力）運動。 [サティヤグラハ運動] = [全インド＝ムスリム連盟も同調。]

1922 年運動停止宣言後、ガンディー投獄（1922～1924） [政治闘争から社会的解放運動へ。]

ヒンドゥー教徒とムスリム宗派の対立深刻化→ムスリム，反国民会議派・親英路線に転換

1925 年インド共産党結成 [運動の急進化]

※ガンディー自身はマルクス主義理念（階級闘争）は拒否。

1927 年憲政改革調査（サイモン）委員会を設置するがインド人含まれず

1929 年以降， [14] （完全独立）要求。 [[15] の主導権確立]

ガンディー再登場→「 [16] の行進」開始（1930）

1930～32 年円卓会議開催。 [ロンドンで 3 次にわたるが失敗] ∴ 1934 年，ガンディー引退

1935 年，新（改正）インド統治法（連邦制と各州の自治権を認可＝地方自治が進展）

（ミャンマーのインドからの分離。）



[空欄解答（戦間期の西アジア・南アジア）]

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,
9,	10,	11,	12,
13,	14,	15,	16,

東南アジア

<ビルマ（ミャンマー）> イギリス植民地＝インド帝国の一州

1930年代〔 1 〕 党「我らビルマ人協会」結成 {アウンサン、ウーヌー指導}

1935年ビルマ統治法（本国で成立し37年発効＝インド帝国から分離）

<タイ> 1920年、国際連盟に加盟 1932年、立憲革命 {議会政治を樹立}

1938年ピブーン首相就任、1939年国号をタイに改称（←シャム）

<ベトナム> フランス植民地＝仏領インドシナ連邦 ※ファン＝ボイ＝チャウ ドンズー運動

1927年（～30）、ベトナム国民党（中国国民党を模範、ハノイで結成）

1930年インドシナ共産党結成（〔 2 〕 ←1925年ベトナム青年革命同志会（広東））

1941年、ベトナム独立同盟会（〔 3 〕）結成

<インドネシア> オランダ植民地＝蘭領東インド 1920年、インドネシア共産党（アジアで最初）

1928年、インドネシア国民党（〔 4 〕 指導 バンドンで結成 31年解散）

1920年代後半、ムルデカ（独立・愛国）運動

<フィリピン> 米西戦争後＝アメリカ植民地 {民族主義者 アギナルドの抵抗}

1934年フィリピン独立法（10年後の独立約束） 1935年、5月独立準備政府成立

1942年、日本軍占領 {フクバラハップ結成＝抗日ゲリラ戦}

東アジア

<中国>



※新文化運動〔 5 〕（白話（口語）運動＝農民への啓蒙運動）の展開。

<魯迅>

北京大学中心〔封建主義、儒教批判（マルクス主義の流行。）〕

〔 6 〕「新青年←青年雑誌」の刊行 「民主（主義）と科学」を旗印→儒教道徳を批判

胡適「文学改良芻義」白話文学を提唱（1917） 魯迅「狂人日記」「阿Q正伝」

<日本の動向>

1914年8月、大戦勃発 11月陸軍＝山東省の青島、海軍＝独領南洋諸島（地中海に派遣）侵攻

1915年1月対華二十一カ条の要求、

17年1月、石井・ランシング協定 原敬（1918～21）初の政党内閣

1925年、普通選挙法（25才以上の男性） 治安維持法

中国代表団の要求を米は支持、英仏は日本を支持

1921～22年、ワシントン会議 {九カ国条約で山東地方の利権返還（旅順・大連は返還せず）}

1923年関東大震災 1927年金融恐慌

大戦後、〔 7 〕 運動

〔日本製品の排斥、ストライキの発生→中国政府、独とのヴェルサイユ条約の調印を拒否〕

1919年7月〔 8 〕 宣言…旧ロシアの帝国主義的特権を放棄→中国国民歓迎

1919年10月中国国民党成立。〔中華革命党改称、＝大衆政党化。（国民革命を目標。）〕

※1917年、21年、23年 広東軍政府（西南派の軍閥と連合）

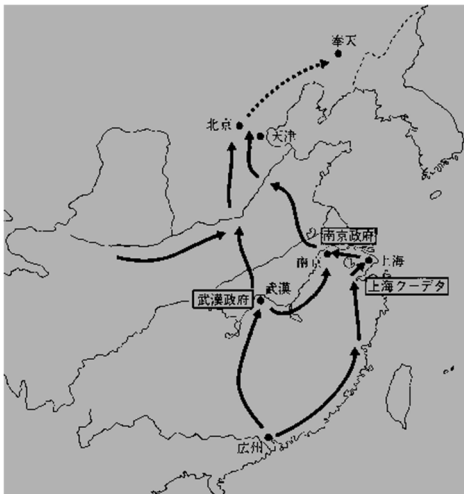
1921年、中国〔 9 〕 成立（上海） ←ワシントン条約（9ヶ国）〔日本進出後退。〕

1923年、孫文・ヨッフフェ会談

<孫文>→



〔第一次〔 10 〕 〕（1924～1927） 「連ソ、容共、扶助工農」



革命勢力を国民党に結集（共産党員は個人の資格で入党）

1925年、北上宣言。孫文の死。「革命いまだならず」

〔 11 〕 国民革命軍〔黄埔軍官学校〕を指揮。

1925年、〔 12 〕 運動

日本の在華紡績工場の労働争議が発端

→反帝国主義運動の高揚

国民政府樹立（1925.7、廣州）

左派（汪兆銘、27年1月、武漢政府樹立）と右派の主導権争い

（第1次）北伐開始（1926） 蔣介石指導

1927年4月、〔 13 〕 （四・一二）クーデタ〔3月、南京事件が契機〕←浙江財閥、列強の圧力。

9月、南京国民政府（武漢政府を統合）

1928年4月、（第2次）北伐再開。北京に接近→日本、山東出兵（第3次田中義一内閣）

…北伐を妨害（28年5月、済南事件）

「6月、奉天事件（関東軍が〔 14 〕 を爆殺。張学良は国民政府を支持）」

蔣介石〔浙江財閥と提携（アメリカ・イギリスの支援＝法幣）一党体制による統一政権樹立〕

※法幣発行（ポンドと連動）

井岡山ソヴィエト（毛沢東）＝紅軍建設 1931年、中華ソヴィエト共和国臨時政府樹立。

1931年9月、〔 15 〕 事変〔柳条湖事件〕

1932年、上海事変。満州国成立。〔執政、溥儀〕←リットン調査団〔国際連盟が派遣。〕

1933年5月、塘沽停戦協定 安内攘外



1934 年満州国帝政実施 国民党瑞金占領 [→陝西省延安]
 =大西遷 [[16] (1934～1936)]
 {1935 年, 遵義会議。「北上抗日」
 → [17] 宣言 [抗日民族統一戦線の結成。]}
 1936 年, [18] 事件 [(張学良)]
 ←共産党, [19] 等が平和解決。
 1937 年 [20] 戦争 [7 月, 盧溝橋事件から勃発。]
 8 月上海占領→9 月, 第 2 次国共合作。(1937～1945)
 南京占領=南京事件 1938 年 1 月, 汪精衛 (汪兆銘) 南京政府
 (南京→漢口 (中国湖北省東部の都市) →重慶)

朝鮮・モンゴルの動向

◎1919 年 [21] 運動 (李太王の葬儀直前) {武断政治から「文化政治」に支配を転換}

※大韓民国臨時政府 (上海) 李承晩 金九

日中戦争勃発後, 朝鮮支配強化=皇民化政策・[22]・神社参拝強制など

◎辛亥革命の動揺→モンゴル人民革命党 { [23] 等の指導}

1924 年 7 月, モンゴル人民共和国 (ウランバートル) の成立 {第二の社会主義国家誕生}

[空欄解答 (戦間期の東南アジア・東アジア)]

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,
9,	10,	11,	12,
13,	14,	15,	16,
17,	18,	19,	20,
21,	22,	23,	

第二次世界大戦勃発

∴ ドイツ（西部）[←英・仏宣戦布告。]，ソ連（東部＝カティンの森事件）の[1] 分割。

<独の動向>

一時的平穏後「奇妙な戦争」→1940年4月デンマーク・ノルウェー侵入→5月オランダ・ベルギー侵入

6月、仏パリ陥落。[2] 政府（ペタン内閣）] 6月，伊参戦。

仏[3] 英へ亡命。（自由フランス政府）] のレジスタンス運動隆盛。

<ソ連動向>

[4] 併合 [エストニア・ラトヴィア・リトアニア]

[5] 戦争（1939～40）{国連を除名} →ベッサラビア併合（ルーマニア領）

[6] 年4月，独＝バルカン半島へ圧力 [イタリア軍救援のため] =「独ソ関係緊張」

[ルーマニア・ブルガリア・ハンガリー・ユーゴスラヴィア（ハルチザンの活躍∴指導者ト-）]

1941年 3月，米（[7] 法）で英援助。

=ソ連，1930年代の肅正（トロツキ派＝以前軍部を掌握。）により軍事力に不安。

4月，[8] 中立条約。

[日ソはすでに交戦状態＝1938年，張鼓峰事件・1939年，ノモンハン事件で衝突。]

6月，独ソ開戦。

[1943年2月，南部[9]]（現ウラルゴグラート）の戦いで独敗北。]



<日本の参戦>

日中戦争の長期化（国力消耗）→南方進出

1940年9月[10] へ侵略。

40年9月日独伊三国軍事同盟

1941年8月石油供給停止→「ABCD包囲陣」の形成

11月，「[11] =ノート」での勧告。

→東条内閣 [中国東北部からの全面撤退]

12月，[12] 戦争開始

[真珠湾攻撃とマレー半島上陸→米英に宣戦]

開戦後，半年間日本優勢…東南アジア各地を占領→「[13]」の提唱

41. 12 香港・42. 2 シンガポール・5月マニラ・インドネシア（石油ゴム）・ジャワ，スマトラ

現地の日軍隊は自活を要求

日本国内…軍部の権力強化→言論や報道の統制

朝鮮…「1930年末〔14〕」などの同化政策を推進

→さらなる過酷な日本支配→朝鮮人の強制連行→1943年3月、徴兵制の適用

東南アジアの占領地…当初、植民地からの解放者→軍隊による資源収奪と治安維持

→現地の歴史や文化を無視→日本語教育・神社参拝強制、住民へ残虐行為、強制労働多発

日本の工業基盤弱体化→長期戦遂行能力が欠落

→〔15〕海戦で敗北（1942年6月）→劣勢へ

大戦の終結と連合国の協力関係

1942年、連合軍（英、米）北アフリカ上陸。6月、〔15〕海戦で日、敗北。

1943年9月、伊降伏。

〔シチリア上陸→ムッソリーニ解任=ファシスト党解体〔16〕〕政権が無条件降伏

1944年6月、ノルマンディー上陸開始。〔〔17〕

ソ連軍（ルーマニア・ポーランド進出。）

1945年5月7日独無条件降伏。〔ヒトラー自殺（1945年4月末）→ベルリン陥落〕

アメリカ軍サイパン・レイテ島奪回（1944年）→フィリピン奪回（1945年2月）→45年3月硫黄島

→3月、東京大空襲→沖縄本島（1945年4月上陸～6月占領）

8月6日、〔18〕原爆投下。8日、ソ連・対日宣戦布告。9日、長崎原爆投下。

8月15日、日本無条件降伏。〔ミズーリー号での調印。（14日ポツダム宣言受諾）〕

<連合国の協力関係>

※9月2日降伏文書の調印

○洋上会談＝〔19〕憲章（1941年8月）

〔英チャーチル・米ローズヴェルト＝戦後の平和構想（国際連合の設立）〕

∴11月米の中立法廃止。〔20〕宣言（1942年1月）…戦後構想の原則

{領土不拡大・民族自決・貿易の機会均等・軍備縮小・海洋の自由・国際機関の再建}

○カサブランカ会談（1943年1月）〔英・米＝シチリア上陸協議。〕

∴ソ連接近5月、〔21〕解散。

○〔22〕会談（1943年11月）

〔ローズヴェルト・チャーチル・〔23〕〕＝対日処理方針決定

○テヘラン会談（1943年12月）〔ローズヴェルト・チャーチル・〔24〕〕

北フランス上陸作戦の協議→ノルマンディー上陸作戦決行（1944年6月）

→パリ入場（1944年8月）→〔25〕臨時政府樹立

◎ [26] 会談 (1945 年 2 月) [ローズヴェルト・チャーチル・スターリン]

{ ドイツ処理の大綱 (4ヶ国分割管理), ソ連の対日参戦の秘密協定。
国際連合における拒否権確認。



○ ポツダム会談 (1945 年 7 月)

<ヤルタ会談> →

{ [27] チャーチル (→ [28]) ・スターリン

[∴ ポツダム宣言 発布。 (調印国 = 米・英・中)]

<大戦の結果>

連合国側…反ファシズムを標榜→新しい戦後秩序の提示…大西洋憲章→多くの国の支持

ファシズム諸国…支配権確立をめざすだけ→普遍的理念なし

→暴力的な占領地支配→各地の民衆の抵抗運動→全世界を敵に回す→敗北

第二次世界大戦の犠牲者数…数千万人→人種的・宗教的差別による追放, 大量虐殺も含む→難民の発生

米ソ両国が連合国の勝利に決定的役割→戦後の指導的地位確立→ヨーロッパの地位低下

中国やアジア諸地域の抵抗運動→戦後, 植民地支配打破, 独立達成の力量獲得

多大な犠牲や国土の荒廃への反省, 核兵器の登場→戦後の諸国家・国際体制の方向を決定する要因

[空欄解答 (第二次世界大戦))]

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,
9,	10,	11,	12,
13,	14,	15,	16,
17,	18,	19,	20,
21,	22,	23,	24,
25,	26,	27,	28,

【戦後，中国社会主义の動向（文化大革命など）】

双十協定（1945.10）国内平和・内戦回避→政治協商会議（1946.1）

国共内戦（1946.7）→憲法を制定し，〔 1 〕 中華民国總統に就任（1948）

人民政治協商會議招集（1949.9）＝国民党←→共產党（土地改革で農民の支持）}

{国共内戦（特使〔 2 〕）の調停は失敗。}

〔 3 〕 成立（1949.10）新民主主義

中ソ友好同盟〔 4 〕 条約（1950.2）1980年解消

主席（毛沢東） 首相（〔 5 〕）



<毛沢東>

→∴12月，台湾政府〔蔣介石＝当初は米も支持。1952年日華平和条約〕

第1次五カ年計画（1953～57）…工業化と農業の集団化の推進 ∴三反五反運動（1951～1953）

→1953年，合作社（農村の集団化）

第2次五カ年計画（1958～62）〔 6 〕 設立（失敗，1500万人の餓死者）〔大躍進時代〕

農村の実情を無視して行い，農業生産が混乱。〔人口の減少も招く。〕

{政策失敗による体制批判に対して後に文化大革命が展開。}

1949年，ソ連・東欧・インドが承認 50年イギリス承認

1964年，フランス・70年カナダ・イタリア・72年日本 事実上アメリカも承認

1958年，共產党八期全国大会

〔〔 7 〕〕（1959年国家主席就任）・鄧小平等＝経済計画の見直し主張]

毛沢東＝「新しいブルジョワジー」「官僚主義階級」の台頭の危惧を提唱。

資本主義を歩む党内の実権派＝〔 8 〕 派との対立
(修正主義者による資本主義の復活の危機)

<世界の情勢> ∴中ソ論争から紛争までの過程。※アメリカ帝国主義戦争の侵略〔ベトナム戦争〕

1956年，ソ連共產党20回大会。〔スターリン批判。〕

1959年〔 9 〕 反乱 人民解放軍が鎮圧（ダライ=ラマ14世 インド亡命 中印関係悪化）

1960年，ソ連の中国への経済援助停止。 ∴中印国境紛争でインドを支持。

1962年，キューバ危機でのアメリカ帝国主義への降伏に対し，修正社会主義と批判。

1968年チェコ事件ではブレジネフ・ドクトリンを社会帝国主義・社会ファシズムとして批判。

1969年，ダマンスキー島（珍宝島）での〔 10 〕 勃発。

吳晗の風刺評論への弾圧から始まる。劉少奇失脚＝プロレタリア文化大革命

林彪[国防相]・紅衛兵の活躍 1971年林彪事故死後〔 11 〕運動（1971～1973）が展開。]

※1971年、国連総会で中華人民共和国の国連代表権を決議（台湾政府を国連から追放）

1976年1月、〔 12 〕の死。 7月、朱徳の死。 9月、毛沢東の死。

1977年、11全大会。〔 13 〕／文革路線から建設路線への転換声明。]



四人組逮捕。〔江青（毛沢東夫人）・王洪文・張春橋・姚文元〕

<鄧小平>

〔 14 〕の復活（民主化は鎮圧）華国鋒が首相に就任＝文化大革命の終了を宣言（1977）

1978年8月日中平和友好条約（79年米中国交正常化）

1978年12月改革開放 経済特区（税制優遇・経済管理の柔軟化）

「四つの現代化」（農業・工業・国防・〔 15 〕）の推進→文化大革命の犠牲者の名誉回復

新指導部成立（1981）鄧小平中心→一連の経済改革（社会主義市場経済＝改革開放経済）実行

…〔 16 〕の解体，農業生産の請負制，外国資本・技術導入による開放経済，

国営企業の独立採算化など→周辺諸国との関係改善

急激な改革→社会の動揺→学生・知識人の批判…〔 17 〕なき経済改革に不満

（第2次）天安門事件（1989）…民主化を要求する学生・労働者が天安門広場に集結←武力弾圧

趙紫陽総書記解任→〔 18 〕後任（国家主席 1993～2003）となる

経済改革・開放政策の継続→ASEAN諸国との国交正常化（1990以降）→韓国と国交締結（1992）

→イギリスから香港が返還される（1997） 50年間（一国二制度）※マカオ 1999年末返還

→鄧小平死去（1997）→江沢民，最高指導者となる

華南経済圏の発達〔広東省（珠江デルタ地帯）

2003年，胡錦濤国家主席就任。（首相温家宝） 改革開放政策の推進

2008年北京オリンピック（チベット，ウイグルの分離自治を支持して中国に抗議）

2010年GDP（国内総生産）世界第2位 2013年習近平国家主席

〔空欄解答（戦後の中国（文化大革命含む）〕

1,	2,	3,	4,
5,	6,	7,	8,
9,	10,	11,	12,
13,	14,	15,	16,
17,	18,		